
妖ノ者～アヤシノモノ～

kugane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖ノ者〜アヤシノモノ〜

【Nコード】

N6465M

【作者名】

kugane

【あらすじ】

日常は人によって変わる。それがどれだけ異常なものであると、それを当人が日常だと受け入れているならそれは日常だ。

しかし、普通の日常を送ることを許されない者を果たして人と呼べるのだろうか？

これは人の形をし、人の命を持ち、人の生活をし、しかし、人でない事をごく当たり前に受け入れている、一人のヒトデナシの話。

コンセプトは最強の主人公。何があってもどんな状況でも絶対に負

けないと言つ事が確定している、そんな主人公ではたしてドラマは可能なのか？そんな無謀な挑戦です。

1 - 1 異常に異常な日常（前書き）

初投稿になります。読み手の事を考えずに書いていた気がするのだから読み難いかと思いますが、よろしくお付き合い下さい。

1 - 1 異常に異常な日常

学舎。^{がくしゃ}人、主に成人未満の子供が社会に出るために必要な知識を得るための教育施設。この国、摩羯ではある一定の年齢になるまでは学舎に通う義務を課せられている。尚、年齢は六歳からで初等部五年、中等部四年、高等部三年の最低12年は学舎に行く事が義務となる。

さて、この学舎にも生徒達がいる。全舎生徒数10万を越える国内最大の国立学舎である。その中等部四年の第四組、金髪の少年が授業を受けていた。いや、受けているというのは正確ではないかも知れない。なぜなら彼は窓の方を向いてボーっとしているからだ。

「…くん」

彼にかけられる声、

「…のくん」

授業をしている教師からのものだ。

「もう！クガネ！」

「ん？」

やっと聞こえたのかそこでやっとその少年は教師の方を振り向いた。

「あ、わりいハク、呼んでたか？」

「コホン、ツチノくん、ここは学舎ですよ。ちゃんと先生をつけて呼びなさい」

「ハクちゃん先生？」

ガクンと膝から崩れ落ちるハクと呼ばれた教師。ついでに教室の中から軽い失笑が起こる。完全に遊ばれていた。ツチノ、それにクガネ、その両の名で呼ばれた少年は土野金^{つちのくがね}と言う名を持つ。先述したとおりの金髪であり、ひどく白い肌をしている事からもそれが染色ではなく地であることが分かる。顔立ちは中性的、しかもどちらかといえば女性寄りに中性的である。根元で適当に縛つてある腰まで届く長い髪も手伝つてパツと見ただけで彼が少年であることに気付

く者は少ないだろう。

今彼が受けている授業は、この国ではまだ珍しい魔導学の時間であり、その担当である女性教師、ハクリ・ヴァイスは金とは生徒、教師という関係の他に友人同士という関係もある。さらにいうなら超然的な不登校児である金にとっては生徒教師の関係よりも友人関係の方が自然であり、つまり、そのノリでからかっているのだ。

「ふっふっふー」

ハクリが怒気に溢れた爽やかな笑みを浮かべる。

「どうしたハク？ん、ん、ハクリ先生？慣れねえなこの呼び名。出産でもするのか？黎也とは清い付き合いが続いてるもんだと思っただが」

「ちがーう！」

ガーッと唸るハクリ。

「ツチノくん！この世界における生物の定義は！？」
ズビシッ、と音すら鳴りそうな勢いでハクリが金を指差す。

「ん？ああ、出題か。ハイハイ、陽性生物、陰性生物、無性生物の三種類。動物が陽性、陰性で植物が無性。んで動物の中で胎生哺乳類、卵生哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類が陽性。逆に陰性なのが妖知類、妖獣類、妖魔類だ。一応妖怪も陰性だけど、こいつは先三つのいずれかに属するから省いていいだろ。ちなみに陰性の種類が少ないのは単純に分けにくいからだ。今は外見と知能差で見てるからな。むしろ種族による種類分けの方がいいくらいだ」
眈々と、当たり前であるように金が言う。

「はい、なら陽性、陰性の違いは！？」

ハクリはやや興奮気味、デフォルトでエクスクラメーションマークがついている。

「まあ色々あるけどな。主なものつつたら魔力と妖力だろ」

やはり投げ遣りに金は答える。金は目が閉じているか開いているかわからないほどにまぶたが降りているため本当にやる気がないようにしか見えない。

「陽性の生物には魔力、陰性の生物には妖力がある。基本的には陰陽の属性が別れるだけでその本質は変わらない。ただし、科学的にもしくは生物学的に、これらがどんな形で生命に関与しているかは不明だったりする。だが、事実としてこの魔力妖力が切れると生命活動に異常を起こし、場合によっては死ぬことすらあることから、本来はどんなものに使われているかはわからなくとも必要であることは確かだ」

金は一息でそこまで喋りきり、そこで一旦言葉を止めて唇を舌で濡らす。

「で、この魔力と妖力には行使法がある。まず魔力からだが、つまり魔術と超能力。番外として魔法。魔術も超能力も基本的に魔力を使うことにはかわりはないが、違うことがいくつかある。まず、魔術は後天的に得るモノで超能力は先天的に持っているモノだ。さらに魔術は魔術式と発動印を使うことで多種多様な、例えば火を出したり氷を出したりあるいは擬似的な物を作り出したり、ことができるが、超能力は先天的な物であるがゆえにそう言った式や印を使わない。かわりに唯一つの行為、火を出すなら火を出すことだけ、しか出来ない。さらに超能力は女性にしか使えない、つか、女性以外に超能力を使える者は確認されていない。ちなみに一般には超能力という呼び名で定着しているが本来の呼び方は先天性魔導行使法症候群」

症候群、すなわち病気という扱いである。ただしそれでは感じが悪いので一般的な超能力という呼び方をされる。

「次いで妖力の方だが、こっちは異能力。形としては実は超能力とかわらない。一人の妖は一つの異能力しか持たないしな。ただし超能力とちがひ異能力は妖なら男女関係なく持つてるし全員が使える。その使える能力は基本的に種族によって決まってる。代表的な大妖三族で言うなら陰影族は影に関する能力を持っている。ま、こんなもんか」

教科書に書いてあることをそのまま口語にしたような金の発言はつ

まり正解ではあるのだが教師、ハクリは面白くないらしい。

「授業聞いてないのに成績いいっていうのは絶対反則だと思うなー、先生は」

「あはは、それ、いうだけ無駄だよハクリ先生。だって金君だもん」自信たつぷりに意味のわからないことを言う声がした。声の発生源をたどると一人の少女に突き当たる。美少女と言ってなんら差し支えない容姿を持つその少女は名を水島銃みずしまうしがねと言う。血縁的には金の従妹にあたる存在だ。

金は軽く銃の方へ顔を傾け、すぐ正面へ戻したため息を吐く。普段不登校児な金が学舎に来たのは単に銃のせいだ。

金は今従兄弟である水島の家に居候している。それはおよそ二年前からだ、居候のさいに人生最大の恩人であり金が世界で唯一敬愛する人物である水島家の長女、水島錠みずしまかけがねに、

「働かざる者食うべからず、ですよ、くーちゃん。そんなわけで手伝ってくださいね」

と水島家の家業を手伝うことになった。金が人の言うことを文句なしに聞くのは、この世界でも精々五人くらいであろう。

この家業と言うのが雑業屋ざつぎやというものでいわゆる裏稼業なのだが分かりやすくいえば何でも屋である。が、裏稼業と言うことで来る仕事がなかなか並大抵ではない。普通の何でも屋のような仕事も無いではないが、基本的には要人護衛だの犯罪事件解決だのいう、表沙汰に出来ない公的なもの。水島雑業店といえはその道でかなり名が通っているため様々な場所から依頼が来るのだ。

そして金は最近とある事件解決のため海外に出張していた（依頼主はその国の首相、金と友人の間柄である）。そのため金と会えなかった事を不服とし、頼みを一つ聞くようにと強制したのだ。特に断る理由がなかった金がそれを承諾したところ、そこから間髪入れずに学舎に共に行くようにとの要求が返ってきた、ゆえに金がここにいる原因は銃にあるのであった。

「今さらに片付けていい問題じゃないのよ、ウチガネちゃん。だい

たい天才なんてこの世にいやいけないのよ」

無茶苦茶な事を言い出すハクリ。

「天才なんてね、高慢チキで横柄で態度デカイに決まってるんだから。その上自分は何にもしなくても何でもできるから周りを見下してるのよ」

偏見きわまりなかった。

「つか、全部同じ意味だよな。語彙が豊富なのは結構だが言ってることが子供っぽいぞ、ハク」

あとオレは天才じゃない。皮肉っぽく金は付け足す。

「だーからー、学舎では先生をつけなさいってば」

自分の方がよほど生徒と先生という間柄をとっばらっているくせに今さらな言い種ではあった。

「はいはい、魔導行使術学教師にして魔導学博士号を持つ世界に四人の本物の魔術師の一人、白の本物、のわりに先週の魔術行使実験において研究室をそののある建物ごと意味消滅させそうになり危ういところでオレと黎也におさえこんでもらったハクリ・ホワイト・ヴァイス先生？」

容赦なかった。

「ウワアアアアアアアアアン」

泣き声らしきモノを上げて教室を飛び出すハクリ、と同時に授業終了を告げるチャイムがなり、金が肩をすくめたのを合図としてこの時間の授業は終了となった。

その約二時間後、昼休み。本来なら昼食をとるべきであるその時間、なぜか金は体育館の裏手にいた。そういった人通りの少ない場所は学舎には実のところ多く存在するが、そのような場所で行われることは数えるほどもないだろう。そして、金がその数えられる内のどれにあたるかと言えば、見る限りにおいてはひとつに限定できるようであった。

金は複数の体格が良くガラが悪い男子生徒に囲まれていた。数にし

て十人。指で数えられる以上の数字を知らないのだろうと言われれば首を横に振るのに時間をかけてしまうような連中だった。

「土野金だな」

一際体格の良い男子生徒が威圧的に金に向かう。

「自分たちで呼び出しておいで確認するなよ。違ったらどうするんだ」

金は動じない。むしろ退屈そうですらある。さっさと戻って昼食をとりたい、そういった態度であった。

「てめえ、全然来ねえくせに調子乗ってるらしいじゃねえか」
「？」

金の言いに苛立ったのか更に語気を強くしてその男子生徒が言う。

しかし、主語やら目的語やらが抜けているので会話ができない。調子に乗るとはそもそもどの行為を指しているのか？金は目立つ行為としてはハクリをいじめて遊んだくらいのもりであったのだが。

「わかんねえか？てめえ、水島につきまとしてるらしいじゃねえか！」

「??？」

尚更わからなくなった。この学舎は初等部、大学部までのすべてがあり、金に関係した水島姓は全員で三人いるが、その誰にも金はつきまとった覚えがない。そういった見方をするのなら常に金の近くにいるのは銃であろうが、彼女にはつきまとわれてはいてもつきまとったことはない。

「ん？ああ」

そこで金は納得した。視点が違うのだろう。というか視線が曇っているのだろう。そういった勘違いというか思い込みが起こる理由を金はいくつか思い付いたが、この場では更に一つに絞ることが出来た。

「ふーん、お前、銃が好きなんだ？」

途端、その男子生徒の顔が朱に染まる。

「うるせえ！水島に近づくんじゃねえ！」

「いや、そうは言っても従姉妹なんだが。しかも今、オレは水島家に居候してるし」

金のその言葉は全く聞いてもらえず、その男子生徒が後ろに引き他九人が前に出た。

「フム」

金が軽く首を傾げた時、一人が思い切り金の顔面に拳を突きだした。おそらく彼の会心であったであろうその一撃はしかし金に当たることはなかった。首を傾げてその一撃をあっさりかわした金は勢い余って突っ込んできたその首に第二関節までまげた人差し指と中指を突き入れる。一言も声をはさずにその男子生徒は地面にうつぶした。

残り九人がざわめく。金にとっては十分に余裕をもって行動した、十二分に手加減をした攻撃というか防御だったのだが、それが相手方にとつては騒ぐにたることだったらしい。九人の内八人が金を囲む。

左右から同時に拳が来る。九人目、先ほど金の前でなにやらわめいていた男が合図を出していたので大したことではない。金はその拳をギリギリまで引き付け軽く体をずらしてかわす。殴りかかった二人は拳を引き留められずお互いの顔面を殴り合う事になった。手加減をしていなかったのであらう、鼻が砕ける音が双方で聞こえた。

顔を抑えてしゃがみこむ二人を見ることすらせず、目の前から殴りかかってきた相手の水月みづおちに踵をめり込ませる。そして即座に半身を反らすと後ろから何やら鉄パイプのようなものを降り下ろした男子が驚愕する。しかし、降り下ろしたパイプは止められず先ほど金蹴った男子にクリーンヒットし、鐘のような音を奏でた。その鉄パイプを持った男子の左首に第二関節まで曲げた親指を軽く突きを入れておとし、その向こうから殴りかかってきた男子の顎にかすめるように拳をあてる。脳を揺らされ崩れ落ちるその男子にも眼は残さず、後ろから蹴りを放った男子の足を受け止めそのまま上に持ち上げた。

その男子はバランスを崩し後ろの壁で後頭部を強かに打ち付け昏倒した。レンガで打ちかかってきた男子のそのレンガを蹴りで粉碎し、その足を降り下ろすとその爪先が顎先を掠め男子に脳震盪を起こさせた。

「オレじゃなければシャレにならないぞこれ」

気絶したり倒れてうめいている九人を後目に最後の一人に金は視線をむける。

「言っておくけど、銃とオレは単なる従兄妹だ。あと居候。銃が気になってるなら本人に言うんだな。オレにあたってもしょうがないだろ」

そう言つて金は踵を返す。直後に起こった雄叫びと、ブンツという棒の様な物を降り下ろした時に起きる風切り音は、後ろも見ずに跳ね上げられた金の右足に遮られることになった。

「あり？どこ行つてたの、金くん？早くお弁当食べようよ」

教室に戻った金は銃のその言葉の前半に特に興味無さそうに、

「害虫駆除」

とだけ答えた。

さらに昼休みが終わり五限目。金はまたしても妙な事態におちいつていた。

「土野金くん、俺は六笛菅泰、むてきすがやす剣道部主将だ。我が恋路のため、ぜひ俺と試合をしてほしい」

「あー、まあいいや」

五限目は体育で種目は武道だった。そこでのやり取り。ことの起りは菅泰の銃への告白。それに対し銃は、

「何でもいいから金くに勝てば付き合つてあげる」

と答えたらしい。

「甚だ迷惑だ」

とは言うが一応名目は体育の授業である。授業に参加している以上

断る訳にもいかなかった。

「金さん、よろしければ防具はこちらをどうぞ。私の物ですが」

小柄なため身体に合う防具を探していた金に一人の女子が防具を差し出す。ちなみに女子は教師不在のため自習。金も菅泰もそれなりに人気があるためかなりの人数が見学に来ていた（銃含む）。

「ん、ありがと。えつと」

「私は剣道部女子主将の関ヶ原井草と申します。同じく副主将の仙石蜜義と共にこの度審判をさせていただきます」

などという会話をしつつ枠内へ入る。

「おい、四季姫まできてるぜ」

「ほんとだ、水島さんもいるし、すごい状況だな」

四季姫とは金の所属する中部部四年四組に同じく所属する野茨春姫、灰掃姫夏、人魚秋姫、冬白雪姫をまとめて呼んだものである。タイブが違うがそれぞれが美少女であり、四人で一緒にいることが多い性格としては、野茨春姫はのんびり屋で何かと居眠りをしているシーンが多く見られ『眠り姫』の個人的なあだ名で呼ばれている。

灰掃姫夏は勤勉で世話好き、ただし親が大会社の社長であり『シンデレラ』のあだ名をつけられている。

人魚秋姫はスポーツ万能でボーイッシュな少女であり、水泳部に所属している、しかし、その性格に似合わず歌がうまいという特技があり皆からは『人魚姫』と呼ばれる。

そして冬白雪姫は立ち振舞いが静かであり、四季姫の間でさえあまり口を開くことがなくクールに振る舞う、さらにその色白の肌とあわせて『スノーホワイト』と揶揄されている。

四人とも学舎では年齢をとわず異性に人気が高い。

そんな雑談を横に試合開始。

竹刀を大上段に構える菅泰に対し金は下段に近い構えをとる。しかし、正確には金は構えていないのだ。

「始め！」

井草の掛け声と共に菅泰が鋭く踏み込み、同時に竹刀をふりおろす。

「オオオオオ！メエーン！」

気合いと共に来るその竹刀を金は受けずに避ける。

しかし金はそこで微かに驚く。降り下ろされた竹刀が直角に近い角度で曲がり、金の胴を狙ってきたのだ。

「ドオオオ！」

その竹刀を金は柄で受ける。一瞬の鏝迫り合い。後ろに跳び退いた菅泰を金は追わず再び竹刀を下ろす。

その一瞬の攻防に道場がどよめく。

そんな雑音を意に介さず、菅泰は気合いと共にまたしても打ち込んでくる。狙いは逆胴。上級者でなければ狙うことはあっても入ることはないその有効打突点に菅泰は正確にかつ鋭く斬り込んだ。

「ドオオオ！」

金は今度はそれを柄で、それも先端の真剣なら石突きと呼ばれる部分で受けた。

「っ！」

一瞬、菅泰が息を呑む。それと同時に金が竹刀を振り切った。

「胴っ！」

柄先端で受けた状態からほぼ竹刀が一回転して打ち込まれたその一撃。菅泰の竹刀は二人の間を通過し、金の竹刀は菅泰の右胴に高らかな音を響かせて打ち込まれた。が、同時に菅泰の足が地面から浮き二メートルほど弾き飛ばされた。

「あ。」

金の技は剣道ではなく実は剣術である。そして剣術は剣道の「有効打突を得る」という目的ではなく「相手を戦闘不能にする」という目的のために作られている。よって必然的に型にはまればどのようなあれ必殺となるのである。

「大丈夫か？」

面を外し駆け寄る金だが、その前に菅泰は立ち上がった。

「うむ、問題ない。続きを」

「・・・タフだな」

場外まで吹っ飛んだので菅泰に反則一が付き、試合再開。

菅泰も今ので完全にスイッチが入ったらしく、動きが格段に上がる。パン、パン、パシン

竹刀のぶつかり合う音と気合いの掛け声が道場に響く。

「ッテイ！」

小手を狙った菅泰の竹刀を金は半歩下がって抜く。

「ツツキイ！」

そこに首を狙った菅泰の突き。実は菅泰は剣道四段の持ち主である。この年齢で四段はよほどの才覚がない限りあり得ない。その突きを、金は有ろう事か首を捻るだけの最小限の動きでかわし、

「胴っ！」

一瞬で菅泰の脇をすり抜けた。

「一本！」

金側に旗が上がる。またも歓声。

「姫夏は六笛君が好きなんだっけ？」

「え？えっと。う、うん。え、えっと、そういう秋姫ちゃんはどうなの？真っ先にこの試合に行こうって言ったよね？」

「わ、わたしはそういうのじゃないって、ほら、こういうチャンバラ的なわたし好きだから」

「えゝ、秋姫ちゃんは一、土野くんが好きなんですよ？見てればわかるよー？」

「っ！は、春姫！み、みてればっていつ見てるのよ！」

「んー、授業中とかー、この試合だってー、土野くんが打ち込まれるたびにびくびくしてるしー」

「・・・そういう姫夏は？」

「わたしー？わたしは一、六笛くんかなー。かつこいーよねー」
ミィハーである。

「そう言うー、雪姫ちゃんは一？」

「・・・別に」

「あー、ごまかしはだめだよー、みんな言ってるんだからー」

実は自ら言ったのは姫夏だけで、春姫も秋姫も指摘されたのに答えただけだ。

「・・・そう。・・・なら、強いて言うなら土野君、かしら。・・・飽くまで興味程度、だけど」

対応がクールすぎである。などと言う四季姫の会話をよそに、二人の試合は白熱する。

面を打つ、それを抜く、返して小手、柄で受け、弾いて胴、竹刀で受け、鰐迫り合い、腕を弾き上げ、胴をねらう、前に出した右足を引き戻しかわす、そのまま踏み込み面へ。

技の応酬。一連の動作がお互い最小限で無駄がない。

金が後ろに跳んで距離をとり、竹刀を地面と平行に突きだして相手の行動を御する。

「やるじゃねえか。普通にすごいぜ」

そっぴいながら金が防具を外す。

「？何をしている？」

菅泰や観客が怪訝な顔をする。

「なに、あんたに敬意を表してオレも少し真面目にやろうかとな。

ここまで凄腕だったのは予想外だったからな」

すべての防具を外し終え、それを場外へ押し出す。

「さて、やろうか」

先程のややとは言え構えていた体勢とは違い、今度こそ一切の構えを金は取らない。そして、

トン

などという音がしたのと同時に、全員が金を見失った。相対していた菅泰も観ていた観客も、全員が見失ったのだ。いや、厳密には金以外にあと一人を除く全員である。

「菅泰君、下、下」

銃の声に菅泰の頭より速く身体が反応する。竹刀を胴の位置まで引き下げ後方へ飛ぶ。その位置を瞬間、何かが通った。

「真月流剣術、双竜・そつりゅうしん蜃」

一本の竹刀での左右からの同時斬撃。

鋒をわずかにかすられた、ただそれだけの菅泰の身体が激しい衝撃に襲われる。

「ぐ、あ」

それでもとどまれたのは菅泰の驚異的な才能故であろう。そうではなくともかわすことができた時点で一般人としては飛び抜けているのである。金に相対しているという意味においては。

「やるな。やっぱり天才だよお前は」

だが、反射くらいで、才能くらいで、驚異的というくらいで、金と対等でいられるなら、それほど世界にとって楽なことはなかっただろう。

金は反射すら、意識下で行う。それはすでに天才であるとか、才能が高いだとか、そういった言葉ではくくれない。

「ま、楽しかった、かもな」

そう言う金の姿は菅泰の後ろにある。

「真月流剣術、白竜・嵐」
はくげつりゅう あらいし

金の持った竹刀と菅泰の着けた胴が粉々に砕けたのはその瞬間であった。

金は秀才でも、天才でも、鬼才でもない。

「また、次があつたらやろうぜ」

意識のトんだ菅泰に金は嬉しそうに言う。

この瞬間。武闘派でも最も才覚に恵まれた菅泰を容易く打ち破ったこの瞬間、金のヒエラルキーは学舎内でもトップクラスに昇ったのだった（本人自覚なし）。

1 - 2 そして異常は通常に

「学舎つてのは安全を第一に考えてなきゃいけないんじゃないかなかったか？」

開口一番に出た台詞がそれだった。場所は学長室。発言者は土野金だ。

「そっいつてやるなよ金。いくらなんでも今回のことは異常がすぎる」

第二の発言者は金の従兄にあたる水島鏡。みずしまにせがね

この二人が揃って学長室にいるのには理由がある。けしてどちらかが問題を起こしたわけではない。

話しは大体一時間前に遡る。

「ん？」

帰り支度をすませあとは学舎からでるだけになっていた金は微かな違和感を感じた。

普段、学舎に來ない金には当然学舎に和感などないのだが、これは金がよく知る違和感だった。その矛盾は金ならではのもの。つまり、異常が通常になった感覚。

「んー、来たか」

やれやれと、金は首を降る。

来た。何がということではない。何かが来たのだ。

金は持ち上げた荷物を下ろす。どうせ持っけていてもまた置くことになるだろう。

「金くん、どしたの？」

よこで銃が小首を傾げる。うちがね 美少女だけにそっいった仕草が実に様になるのだが今においてそれは関係がない。

「悪いな、銃。帰るのはもう少し後になりそうだ」

カバンと一緒に持っていた腰までよりやや長い布袋に入った何かも机に立て掛け、金は先ほど立ち上がった自分の席に再度座る。

「あー、なんかあるの？」

実のところ金と銃はさして長い付き合いと言うわけでもないのだが、それでも一年以上の付き合いはある。雰囲気や、それまでの経験から何かに気付き面白そうに笑う。

「たぶんな。どうもさつきから空気が変わってない」

「いやいや、そんなのわかるの金くんだけだよ」

確かに、金だけである。金が言った空気が変わってないというのは雰囲氣的な意味ではなくそのまま、窒素、酸素、二酸化炭素、水素などを主成分とする普通の空気である。

「異常なんて通常からわかる方が異常だからな。オレの側には来ない方がいいぜ」

「え？私はずっと金くんの側にいるよ？一生でも」

真顔で答える銃に嘘は一片もない。やれやれと金は首を振る。

従妹、金にとっては今のところそれ以外の何者でもない銃なのだが、銃にとって金はもはや明らかな恋愛対象であるらしかった。

「いや、まあ、それはいいとして、どうも変だな。学舎に変化は見えないから、恐らくは空間的な」

そう言つて金は窓の外を見る。そこにはグラウンドがあり、その先には門があるはずだ。

その辺りをさつきから金は視ているのだが、入るものがないても出ていくものがないのだ。より正確に言うなら、出ていったはずのものが入ってきている。と言うべきだろうか。

「平穩無事って言葉は、オレに対する完全なアンチテーゼだよな」
視ながら呟く金。

平和と真逆に位置する自分を悲観こそしないものの、そこに羨ましさくらいは感じるのだ。

「兄貴に相談するべきか？まったく、今日は学舎って場所的に比較的に大人しく終わるかと思ったんだが、そうは問屋が卸してくれないらしいな」

全く要らない物を渡されても困るというものだが。

その時校内放送が流れた。

「ただいま非常事態が発生しました。学舎内にいる生徒は速やかに自分の所属教室に戻ってください。繰り返します・・・」

「さて、と」

金は立ち上がる。そして教室のドアに向かった。

「ん？金くん、どこいくの？」

問う銃に対して、

「兄貴のトコ。銃はしばらく教室で待機な」

金はそう言って従兄である鏡を迎えにいったのだった。

そこから金は鏡を連れて学長室に向かったのだった。

「どういったことになってるんだ？」

鏡の問いに、

「空間遮断。というよりは空間湾曲かな？結界みたいなもんだな。ひとつの空間を外界から完全に遮断する」

「何が目的なのでしょう？」

この発言は学長のもの。

「そこまでは、はてなだな。意味のある行為かない行為かは判断がつかない」

この学舎は国内有数の巨大さを誇る。初等部から大学部まで、総計約十万名は伊達ではない。

その人数を全て囲い込んだ。意味がない方がおかしいだろう。それが金の判断だ。

「ま、オレ達も早く帰りたいしな。水島雑業店、この仕事、受けてやるぜ。ま、無料ロハとはいかねーけどな」

雑業屋、それが金の仕事だ。と、言ってもやるのに何か手続きがい

る類いの仕事ではなく、いつてみれば裏稼業。

仕事内容は何でも屋に近く、仕事を受ければ（それが重度の犯罪行為でない限り）何でもやる。

「報酬は、事前承諾で150。仕事内容によって変動ありだ。異論は認めない」

一切の反論を否定しつつし、金は立ち上がる。

「さて、」

そついいつつ、なにやら反論のありそうな学長と呆れ顔の鏡を置き去りに、廊下に出、

「黎也れいのところにもいつてみるかな」

と、高等部棟、二年教室階に向かった。

高等部棟。

「で、何がどうなってるかわかるか？」

金は親友である魔術師、黒部黎也くろべれいと合流した後、そう切り出した。

「わかるわからんで言ったらさっぱりわからん」

わかるわけがないだろ。と、黎也は続ける。

「だいたい、見抜くのはお前の専売特許だろうに」

「視るものがわからないのに視えるわけもないんだがな」

金はそう肩をすくめる。

「だとすると、何が起こるかしばらく傍観するかな」

教室待機といつても教員ですら事態を理解できていない状態で完全に生徒の行動を制限できるはずもなく、かなりの人数の生徒が好き勝手に歩き回っている。

「ま、これに関係あるのは確かだろうけどな」

そつ言つて黎也はヒラヒラと右手を振る。その手の甲には算用数字の6のようなものが痣のように浮かんでいた。

「そつだろうな」

金も自分の右手を振る。そこにはやはり13のような痣。

ガシャン

そんな音が響いたのは二人が合流しておおよそ2分が経過した頃。

「ふむ」

「ん」

二人合わせて三文字の会話。意思疎通もなにもあつたものではないが二人にはそれで十分であつたらしく、全く狂いもなく同じ方向へ歩き出す。

中部部棟二階一年生教室前。

「事故？」

すぐに場所を特定して到着した金と黎也、さらにその二人に呼ばれた鏡によつての事情聴取。ガラスの割れた原因特定であるのだが。

「はい。その、あの子がその廊下で滑ってガラスに突っ込んだんです」

割れたガラスとその付近に血が付着している。

「それだけなのかい？」

事情聴取をしているのは鏡と黎也。金はそういうことをすると尋問のようになるので現場検証にまわっている。

「はい、あの何かあるんですか？学舎からは出られないし、教室待機を指示されるしで・・・」

鏡は現場を目撃した女子生徒をなだめる会話を続けている。

「金、どうだ？」

黎也はそれ以降の事を鏡に任せ金の方に寄る。

「別になんかの魔術や異能力ってわけでもないみたいだな。魔力も妖力も視えない」

「偶然、つてことか？」

「ん？いやいや、そんなわけ、ないだろうさ」

「だよなあ、と黎也はため息をつく。

「さっき怪我して運ばれてった一年、右手に例の数字が書いてあつ

たからな」

例の数字。金と黎也にもある、学舎の封鎖と共に浮かび上がったものの。

「ちなみに1だったぜ」

「さすが金、よくみてる」

が、数字と怪我に何の関連性が証明されていないので、それ以上はなんとも言つことができない。

「兄貴、ここ任せるぜ」

移動。

「数字が複数あることがわかって、さっきの子が1だった以上、2の奴を探した方がよくないか？」

「まあそれもそうなんだろうがな、この初等部―大学部までの合計10万人超の学舎で、特定の人物でもない奴を数字だけをあてに探すつてのもなかなか難しいぜ？」

米びつの中の赤い米というほどではないだろうが。

そのとき、唐突に悲鳴が上がった。

「また事故か」

左足骨折と頭部裂傷。倒れてきた本棚の下敷きになつてのものだった。

「やっぱり2だったな」

被害者は高等部一年、すなわち黎也と同級生だった。

「ま、ほとんど面識はないけどな。せいぜい選択科目で会うくらいだ」

「まあそんなもんだろうな。そこまでの偶然には期待してないよ」
しかし、と金は続ける。

「二人連続したことで怪我、あるいは事故とこの数字の関連性はわかったが、この数字がどういう法則でついてるかがわからん」

放送で呼び掛けるということもできるが、これ以上のパニックが起きるのは面倒、というのが金の考えである。

「最低13か、ん？まさかこれって」

「どうした黎也？なんかわかったか？」

「もし、だ、金。もし、この数字により怪我をする事を運命付けられているとしたら、どうだ？」

「んー、それってつまりこの犯人が最低13人怪我させたいってことか？この学舎の中で」

「そうだ。いや、より正確に言うなら怪我をさせたいではなく、血を流させたい、じゃないか？」

一人目も二人目もたしかに流血のある怪我だった。

「血を？ちよつとまてよ」

金の思考が高速で回転する。ちなみに金は関数計算をすら暗算で行う。

「血、流血ってことは魔術、いや、呪術か？場所を限定したのは、おそらくここに何かの仕掛けをしてあるから」

「そうだろうな。更に・・・」

そう黎也がいいかけたとき、ガラス、あるいは陶器の様なものが割れる音がすぐ近くで響いた。

金と黎也はその音のした教室に飛び込む。

「どうした？」

そこには散乱した蛍光灯とその直撃を受けたのであろう男子生徒の姿があった。

「3」

金が呟く。

「だな」

黎也はそう応じたあと、

「意識はあるか？ある？なら揺らさないようにタオルかなんかを頭の下に、タオルなんかない？まあそうか、なら本人のカバンを代わりに使え。で、保健室、担架持ってきてもらえ」

簡単な指示を出し、二人揃って教室をでる。

「分かりやすい速度だな」

「ああ、数字の関連性、考えるまでもないな」

「まだ、偶然と言えなくもないが」

「一度なら当然、二度なら偶然、三度あれば奇跡で四度あれば必然だぜ、黎也」

「なら、まだ奇跡的の段階だな」

だが、そもいかなんことは少なくとも二人には明白だった。二人の手の甲に嫌でも見える6と13の数字。

「そつえば、さつき何をいいかけたんだ？」

そこで金が話を戻す。

「さつきつていうと、どの辺りだ？」

「あー、と、ほら、3人目がでるまえ」

たしかに、そのときに黎也は何かをいいかけていた。

「ああ、あれか。あのときはまだ予測だったんだが、今の3人目ではほぼ確信になったな。はじめから少しばかり気になってはいたんだけどな、今までケガしてるヤツは全員高い魔力を持ってる」

「魔力に流血か。ますます儀式めいてきたな」

「この数字がそのまま呪術だな。ケガを負わすための呪術。このバカでかい空間隔離の術式は白のものに間違いないが」

魔術には大きく分けて四つの種類がある。すなわち、黒、白、青、赤の魔術である。これらにはそれぞれに性質があり、黒は現象を、白は空間を、青は物質を、赤は生物をそれぞれ司る。

また、魔術に相對するように魔力にも同じ色があり、魔力の色に應じて術師は黒魔術師、白魔術師、青魔術師、赤魔術師と呼ばれる。黎也は黒魔術師であり、先のハクリは白魔術師である。

「まあ、白だよな。だけどこれ、気配は黒だろ？」

「だな。さつきから微かに感じる術式はかなり独自に黒方面に編んであるし」

ただし、黒魔術師だからといって黒魔術しか使えないわけではなく、術式の編み方によつてはどの色の魔術でも使える。ただ、内包している魔力の色は黒なので白魔術を使おうが黒魔術師なのである。

極端な例をあげるなら、赤魔術しか使えない黒魔術師という者もいる。

「呪術ってな黒魔術に近いらしいからな。しかし、なんだろうなこれ、だいたい四分置きに一人か」

「わからねえな。血によつて発動する魔術なら師匠がいくつか教えてくれたが、アレは飽くまで自分の血だし」

「独自の術式なのかもな。今まで死者はないみたいだが」

「人を殺すような呪いってかなりの魔力を使うからな、血が必要なだけならわざわざ殺す必要はないし、かすり傷で用はなせる」

その話の最中、上階で何かが倒れる音が響いた。

「4。わざわざ見に行くまでもないか。死にはしてないだろ」

「いやいや、そんなわけにもいかねえだろ」

当たり前の黎也の突っ込みに金は苦笑いをする。仕事だ依頼だといつて学長から料金を請求しているのだから、確かにここで確認を放棄すれば職務怠慢だろう。

そして、やはりこの状況においては、怪我人がただの怪我人だということがあり得るはずもなく、見に行った怪我人には4の数字があった。

原因は机。机に腰かけて話していたところ、突然机の足が折れ、倒れたさいにその折れた足で太ももを切ったのだ。

わりと深い傷であったので止血をし保健室へと連れていかせた。

「怪我人の発生場所とか怪我の仕方には全然共通点がないな」

「ないな。呪いだとそこまでの強制はないのかもしれないな。術自体はすでに完成しているものなわけだし」

ここで問題になるのは動機だ。無差別に怪我をさせるならわざわざ呪いなどというまどろっこしいモノを使う必要はない。数字を表すことで相手に狙っていることを教えてしまっている上に、怪我の程度がまちまちだ。なにより、無差別傷害なら快樂をえるためのものである場合が大半だが、この方法で快樂がえられるとは思えない。何らかの意図があつて然りとすべきである。

「意図、常識外的に考えて、この場合の意図ってなんだと思う？」
何気ない様子で黎也が金にたずねる。

「この状況だけ見るなら生贄なまけものだと推測するがな。流血が血の紋をつけるものでないとするなら、これは撒き餌だ」

「なるほど。同意見だな。訂正の必要を感じない」

撒き餌、というよりは血の匂いを漂わすことに意味があるのだろう。それが何を意味するのかはまだわからないが、確かに意図はその辺りにありそうである。

「この学舎内で魔力の高い奴っていえば」

「お前、オレ以外ならあとは魔導学教師と陰秘学科の学生位しか思い浮かばないが？」

「あー、そうか、先生の可能性もあるんだ。俺が知る限りこの学舎で一番高い魔力を持つてる先生ってハクなんだよな」

ハク、ハクリ・ヴァイス。白の本物と称される世界最高峰の魔術師の一人である。

「他に高いのってーと、先生ん中じゃあと二人位いた気がするが。で、生徒でなら俺を除けば一番高い魔力の持ち主は明らかに黒坂だろ」

「黒坂って、夜月ヨシキか？あいつってこの学舎だったのか」

「知らなかったのかよ。一応、夕月先輩きしづけも大学部にいるぞ」

とりあえず、これで先の四人を含め十人までは予想がついた。

「とりあえず、夜月とハクを確認しにいくか」

黒坂夜月は黎也と同じく高等部一年である。

「ええ、確かにあるわね」

確認に来た金と黎也に夜月はためらいなく右手の甲を見せる。

「8か。やれやれ、先は長いな」

「あら。黒部は6なの？金は、13？なんだかお似合いの数字ね」
自分にとってもけっして他人事ではないはずだが、夜月はコロコロと笑う。一連の説明は二人がしたため事情を知らないと言うことは

ない。と、するならかなり豪胆なのだろう。

「これがおきてからの怪我人ねえ。あ、確かちよつと前に教員待機室でなんかあったみたいよ？たしかクロミネ・・・だったかな？非常勤の魔導学の先生が怪我したとかなんとか。数字があるかは知らないけど」

当たり前のことだが、いくら二人の五感が人間離れしていたところで、やはり限度はあり、二人の知らないところでも話しは進んでいく。

「って、そいつが五人目だとしたら、次は俺じゃねえか」
そうなる。

「まあ、怪我すんなよ」

「頑張つてね、黒部」

「清々しいまでに他人事だな！」

友達甲斐もあったものではない。

「ん？」

ともあれ教員待機室に向かうため廊下を歩く最中、金が何かに気付く。

「・・・・・・」

三点リーダー二つ分位の沈黙の後、

「よつと」

バシッ、と何かを蹴った。掛け声は軽くとも世界最強が放った蹴りである。対象物に当たった瞬間、四方に軽い衝撃を与えつつ対象物を吹っ飛ばした。

「ギエ」

妙な悲鳴を上げて壁に激突したそれは、なんとも名状し難い姿をしていた。強いて言うなら小型の猿。だが、一見してそうでないのは明らかであった。顔はまるで人間のようであり、長い尾を持ち、鋭い牙に爪、それに額から一本角がはえている。それを知識として金達は知っている。

「小鬼インブ？」

この世界に強い繋がりを持つ別の世界、地獄に生息する生物である。
「みたいだな。しかし何で」

いつている間にインプの姿が消滅する。そもそもこの世界の生物でないため、生命が止まるともこの世界に返送されるのだ。

「金、黒部、考えてる暇、ないみたいよ」

言われるまでもなく金も黎也も気がついていていた。

「ここは地獄の一丁目あたりか？」

「洒落になってねーんだよ、リアルで」

金の軽口に黎也は苦笑するしかない。

三人は廊下で挟まれていた。

ガイゴイル ナイトメア グレムリン ウィル・オ・ウデスヲハン

「石像魔、悪夢、小悪魔、鬼火、首無騎手、おっと屍食鬼と食人鬼

グール マンイーター

までいやがるな、何でか」

最後の二種類はこの世界の生物だ。

「あー、そつかそつか、久しぶりだから忘れてた。金に関わるところなことになるんだったわね」

夜月はポンと右の拳を縦にして左の手のひらに打ち付ける。

「そりやそうだろうが、来るぜ！」

黎也のそれより一瞬早く、周囲の群が飛びかかる。

「第一の弓よ」

黎也が左手を拳の形にして前方へつきだし、それに右手を添える。

「炎となりて」

さらに弓を引き絞るように右手を引くと、左手から右手にかけて炎が一直線に伸びた。

「巻き起これ！」

その声と共に炎の矢が前方に打ち出され、直線上にいたインプとグール数匹をまとめて焼き尽くした。

「前々から思ってたけど、黒部のそれって、絶対一行詠唱の威力じゃないわよね」

人によっておおよその違いはあるものの、だいたい五秒以下で印が終了するものを一行印と言う。時間がかかるほどその者が使う魔術

の威力は上がる。

ちなみに黎也の詠唱は長い方である。だいたいの魔術師は一行印は一秒程度の短いものを使うからだ。

「炎の化鳥よ！」

夜月の手のひらから鳥の形をした炎が生まれ先にいたウィル・オ・ウィスプをなぎはらう。

「せいや」

ガゴン、と言う表すなら鉄板の上に高いところから鉄球を落としたような音が響いた。黎也がちりと見た先では、金がデユラハンの腹部を貫いていた。無論そこには強固なこの世ならぬ金属で編まれた鎧があつたのだが、見事なまでに風穴が空いていた。

「っしょ」

その腕を引き抜き、さらに首に乗っていない頭部に回し蹴り。こちらにもメキヨットという、もはや愉快とすら言える音とともに胃に包まれた頭も完全に潰された。

「この中で明らかにてこずるやつを苦しめないっていうのは、良いのか悪いのか」

そういつつ黎也は右手の親指と人差し指を伸ばし、いわゆるピストルの形をつくる。

「第二の銃よ、氷となりて、撃ち貫け！」

その人差し指先付近に現れた氷が高速で打ち出され、ガーゴイルとマンイーターを一匹づつ貫いた。

「氷の世界よ！」

夜月の周囲から冷気が発生し、ウィル・オ・ウィスプとナイトメアを凍らせる。

「邪魔だつと」

それを蹴り碎き、金はガーゴイルの頭を叩き壊した。

「第三の刃よ、風となりて、切り刻め！」

「土の穴蔵よ！」

「ほい」

「第四の槍よ、雷となりて、突き穿て！」

「風の行方よ！」

「たあ」

「第五の弩よ、礫となりて、押し潰せ！」

「おりゃあ」

「つて！やるきねえな、金！」

掛け声が気の抜けるものばかりである。

「いやいや、黎也こそこんなやつらに全詠唱してるじゃねえか」

黎也の後ろからインプが飛びかかる。

「第一の炎よ！」

振り向きざまに予備動作なく放たれた火球はインプに当たり爆散させた。

「やっぱり威力がおかしいわよ」

短略詠唱は一行以上の長い詠唱を端折り、必要最低限の部分だけで術式を作るものだ。時間を大幅に短縮できるが、そもそも必要な式を省いてしまったため結果もかなり劣悪なものになる。が、黎也の短略詠唱は形状がたしかに変わっているが威力に限れば大きな違いが見受けられない。

「これで、終わりだなっと」

最後のデュラハンを両断し（素手で縦に）金が一息つく。

「に、しても・・・」

夜月が周囲を見回す。

「やり過ぎたかな？」

金が苦笑する。周囲は魔獣達が暴れていたことに加え、黎也や夜月がわりと手加減なく魔術を放っていた影響で壮絶なまでにぼろぼろで、一部は吹き抜けと化していた。

「むう。さすがにこれは後で修繕費出しておくかな」

金が本気だかふざけているのだから微妙な反応を見せたとき、

「黎也っ！」

一瞬、遅かった。崩れかけていた天井が、崩れた。

「っらあっ！」

金は足元の瓦礫を崩れてきた天井に向かい思いきり蹴りつけるが、威力はともかく強度が足りない。天井を砕きはしたが軌道をそらすことはおろか落ちてくる量を軽減することすらできなかった。

「黒部！」

夜月も悲鳴のような声をあげるが、黎也は無情にも落ちてきた天井に飲み込まれた

1 - 3 平常と非常、通常と異常

魔術は体内に流れる魔力を体外に放出するものだが、魔術師の数がそれほど多くないことからわかるようにそれは簡単なことではない。

魔術は簡単に分ければ四つに分けられるが、もっと単純に分ければ二つになる。大雑把に、射出する場合と身に纏う場合だ。

黎也や夜月の使っていたのは魔力を射出する形。汎用性があるが術式と使用魔力量が大きい。体から離れたものの形状を保つためにも魔力を使わなければならないからだ。もう一方の身に纏う方は、体そのものから魔力を補えるため術式や使用魔力がかなり少なくなる。たとえば、黒魔術や青魔術であれば盾や鎧のような防御型の魔術は強固なものを瞬時に作り出すことが可能なのである。

「あつぶねー」

飲み込まれた瓦礫の中、右腕を掲げて黎也は立っていた。瓦礫は黎也の周囲を避けるように落ちていた。

「無詠唱。咄嗟に盾をはったのか」

第六の盾。黎也の魔術は威力順に番号が振られているが、六から十には防御用の魔術が当てられている。

「つつても完全に無事でもなかったか」

掲げられている側とは反対の腕、左腕に裂傷ができていた。

「つつちゃあ……。これで6か」

「お前ほど身体能力高いわけでもないんでな。スマン」

「いや、黒部は十分に身体能力高いと思うわよ。世界大会でどんな競技でも軒並み記録を更新できるレベルに」

とりあえず手当てが必要である。白魔術で治療は可能だが小さな怪我ではむしろ魔術は使わない方がエネルギーの消費率が低い。

更に代謝の問題もある。白魔術の治療は細胞の分裂を活性化させ時

間を先取りする。簡単に言えば怪我の自然治癒をはや回して行うのだ。だが、人間の細胞分裂と言うのは回数が決まっている。人が一生の内に増える細胞の個数は決められているのだ。

故に白魔術での治療を多用することは事実上、残りの寿命を使って傷を治していることになる。だからこそ、致命的な怪我や今後に関わる怪我以外ではあまり魔術師達は魔術での治療を行わない。

「・・・で、何でいるんだ？ハク」

「怪我したからに決まってるでしょー？」

黎也が人差し指で額を押さえる。頭痛がするわけでもないだろうが、そうでもないと言ってられないのだろう。

「そうか、7はお前だったのか」

ハクリは莫大な魔力を持っている。狙われていてもおかしくないと先にも予測していたが、黎也のことで少しばかりおろそかになっていたらしい。

「あ、凄いこと気づいた。この学舎って本物が二人もいるのね」

「今さらだな夜月」

本物。魔術師が言う本物とはその色に置いて頂点に位置する者の冠する称号である。四色ある魔術に各々本物と呼ばれる魔術師が一人いる。合計で四人、まとめて四色の本物とも呼ばれる。この本物は選出されるものであり、大体の場合が前本物によって指名される。

ゆえに本物の名を冠してはいても本当にその人物がその時代において最高の魔術師であるとは限らないのではあるが、それでも平均値よりは圧倒的に高い実力を有していることは間違いない。

ハクリ・ヴァイス、そして黒部黎也はその本物の名を継いでいる。

黎也は歴代で最年少である。

「っていうか、呑気なこと言ってる場合じゃねえだろ黒坂。次はお前じゃねえか」

「ん？あ、言われてみればそうかも。でもまあ死にはしないみたいだし、適当に逆らってみるわ」

魔力量と魔力の質は夜月も四色の本物と比べて遜色ない。かつては

黎也と最年少候補の座を争っていた、四人いた黒の本物の後継候補の一人である。

「しかし、8か。夜月とオレを除いても後三人いるんだよな」

三人。十万人を超える中から無作為に探すにはあまりにも少ない数である。

「金の教室で魔導学実技専行してるのは？」

「えっと、三人ね。桜通夜道さくらどおりよみちさんと竜胆白華りんどうしろはなさんと折紙赤色をりがみあかいくん」

これに答えたのはハクリだ。金のクラスの担当教員であり魔導学の教師でもある。金の所属するクラスは少し特殊であり、問題があったり、魔術の名家だったり、妖の直系だったり、何かしら特別な生徒が集められたクラスなのだ。

「折紙家の三男坊がいるじゃねえか。そいつが怪しいだろ」

折紙家は摩羯での魔術師の名門である。世界でも十指には入るであろう。特定の色の魔術師だけでなく、四色すべての魔術師が生まれる事で有名だ。

「あとは怪しいのはあ、高一の朱鷺鳥林檎とぎどりりんごさんと林葵はやしあおいくん、高二の雪代麻沙羅ゆきしろましろさん、高三の緋織心あかおりこころさんかな？」

「候補は5人か」

そのとき、にわかに廊下が騒がしくなる。

「黎也、夜月！」

「ああ！」

「ええ！」

「ハク、またあとでだ」

そう言い置くと三人は飛び出す。

「これ、は・・・」

場違いながら、その後継を見た金は苦笑するしかなかった。

逃げ回る学生と襲いかかる下級悪魔。

「魔術師の血を集めて何をするんだか、ある程度予測がついちまったな」

「金、答え合わせは後だ。やるぞ」

「そうだな。久々に軽く本気出しとくか」

そう言うと、

「真月流・強風！」

近くのデュラハンに金の拳が炸裂した。鎧は何の抵抗もなく大穴を穿たれ、ついでに頭はどこかへ消し飛んだ。さらに、

「疾風！」

一瞬、金の右腕が消えた。そして、一匹のインプの頭も消失した。

「烈風！」

首、肩、肘、膝があらぬ方向に曲がったグレムリンが吹っ飛んでいく。

「旋風！」

跳び後ろ半回転蹴り。二体のガーゴイルの石の頭が砕け散った。

「雑魚相手に容赦ないなあ」

といいつつ、黎也も腕をつきだし、

「第一の炎よ！」

黎也の手から炎の矢が打ち出された。

「氷の世界よ！」

夜月の言葉が物理的に場を凍らせる。

魔術界最上位の二人と世界最強が暴れる。一応は事態を収集するためにやっているのだろうが、もはや滅茶苦茶である。

下級とは言え悪魔が、数十体の悪魔が、ものの数分でほぼ全滅。馬鹿げた現状だ。

「片付いたか？」

ふう、とため息を付き、黎也がプラプラと手をふる。「キヤアーツ

！」

「なっ」

甲高い女性の悲鳴のような音、黎也と夜月は思わず耳をふさぎ、金ですら顔をしかめた。そして、さっきの戦闘で奇跡的に無事だった廊下の姿見が唐突に砕け、飛び散った。

「あ」

慣れている金と黎也はその破片をかわしたが、夜月はかわしきることができず、太股の辺りを欠片が切り裂いた。割れた鏡には誇らしげに書かれた赤い口紅の様な「Q」の文字。

クイックシルバー
「女騷靈。やられたぜ」

ホルターガイスト

クイックシルバーは騷靈の一種だ。女性のヒステリーの霊化ともされ、生き霊である場合もある。または無意識のサイコキネシスである場合もあるようだ。

さすがに足を傷つけられた夜月をこれ以上つれ回すわけにもいかないので保健室で待機させる。

「やっぱり何人が増えてたな」

下級悪魔が大量に出現したため、数字に関係のない生徒も数名、ケガをしたようである。

「あ、先生、こちらもお願います」

また一人運ばれてきたようだ。

「あら緋織心さん」

手の甲に9のある女生徒だった。

「9人目と。っていうか雅？」

「あら？金君？」

その女生徒に付き添っていたもう一人の女生徒に金と呼び掛けた。

黒髪で背中まで届く長髪、身長は女性としての平均ほどで、金とほぼ同じ。からだのラインは美術品の様にハッキリと起伏に富んでおり、顔の造形にも全く隙がない。言うならば、絶世の美女だった。

ゆめみずみやび

夢水雅。人形妖の純血族の一つ、夢魔族の一人で、金の顔馴染みである。

「なるほど。変な騒動が起こっていると思ったら、金君が来ていたんですね。納得です」

土野金。自他共に認める世界最強だが、同時に、前代未聞の事件引寄体質である。

「間違えてはいないがなにげに失礼だな」

失礼ではあるが間違えてはいないのが問題なのであろう。

「まあ納得です。水島君も各所で頑張ってくれているようですし。樋口君の噂もちらほら聞きますしね。しかし、黒坂さんが戦線離脱ですか。戦力が低減しますね」

実際、金達がいたところだけに敵がくることなどあり得るわけがないので、他の場所では他の人物が防衛戦をしていたはずなのだ。

「兄さんと紅が防衛戦に参加してたのか。道理で楽だと思っただぜ」

「いつておきますけど金君？あんまりポンポン物を壊すの禁止ですからね。っていうか舎内であればれるの禁止」

それは最早遅いと言えるだろう。すでに最低二ヶ所、壁がなくなつた吹き抜けの廊下が出来上がっている。

「それで、風紀委員として聞くのですが、この状況は何かわかりますか？」

「それだな。一応オレの中では答えは出たんだが、黎也、答え合わせしようぜ」

ゲームが何かのように気軽な調子の金。

「正解しか出せないお前と答え合わせとかしてもしょうがない気もするが、まあ新規の夢水先輩もいることだし調子を合わせてみようか」

そして黎也は指を一本 たてる。

「キーワードの一つ目はこの状況です。空間隔離、範囲断絶、領域閉鎖。言い方は何でも良いんですけど、この規模での範囲を切り取るるとかなりの魔力と精密な術式が必要になりますから、まずいたずらではありません。いたずらでないなら、何らかの意味、意図があるはずなんです」

そこで今度は金が二本、指を立てる。

「二つ目のキーワードは怪我だ」

「怪我、ですか？」

そこで雅がかかるく相づちを入れる。

「そう。それに一つ目にあつたこの空間隔離の魔力元にも関係する。ところで雅、人体で最も魔力が高いものは何かわかるか？」

やはりクイズのように。

「えっと、手、とかですか？」

雅も律儀に答える。ちなみにはあるが、金は人を大抵呼び捨てする。これには金本人の事情が含まれてくるのだが、ともかく歳が上だろうが地位が上だろうが基本的には名前を呼び捨てする。例外は三人だけである。

「一割正解。確かに魔術は手から出すことがほとんどだからな。正解を部位で言うなら心臓だ。そして正解そのものは血、血液なんだ」
「血」

呟くように復唱する雅。

「血っていろんな術法にも用いられるだろ？これにはつまりそんな意味があるんだよ。そして血、流血、つまり怪我だ。怪我をさせ血が流れる。それを媒体として空間を隔離している魔術を維持しているんだ」

そして今度は二人同時に指を三本伸ばし、

「「悪魔」」

と、完全に声を重ねて言った。

「三つ目のキーワードは悪魔だ。さっきからチヨロチヨロとうつとうしく出てきやがる下級の悪魔どもだが、これが最大のヒントだよな」

「ああ、ヒントと言うか答えみたいなものだ。召喚術何て言ったところでもまだに世界間移動は魔法の領域なんですよ。それで、悪魔ってのはもちろん異界、まあ魔界の生物です。この世界はかなり魔界に近くて確かにちよつとした拍子に魔界と繋がっちゃいますが、だからと言って簡単に悪魔を呼べるって訳じゃないんです」

「こちらから繋ぐことは不可能に近い、ならどうするか？簡単だ、向こうから来てもらえばいいんだ。悪魔は人知を越えた存在だ。繋がってる世界でなくとも軽くズレを作ってやれば奴らは嬉々としてそこを乗り越えてくる」

「血って撒き餌もあるしな。さあ、ここまでヒントが出ました。な

ら答えなんてもう簡単に出ますね、アンサーは？」

「・・・わかりたくありませんね。それは」

ニヤリと金が嫌な笑い方をする。

「きひひ、正解だぜ雅。わかりたくねえ、まともな奴ならな。こいつが13の生け贄を使いやろうとしていること。簡単だろ？気が狂つてるとしか思えねえさ、こともあるうに上級の、知性のある悪魔を呼ぼうだなんてな」

あつけなく答えを提出する金。美術品のように整った雅の顔が悲哀に霞む。

「オレじゃあるまいしな」

「・・・そういえば歴史でならいましたね。520年前のタロスの事件。一人の狂った術師が上級の悪魔を呼び出し、市を一つ滅ぼしてしまった、とか」

「ああ、実際に上級の悪魔を呼び出せた例なんざそれくらいだ。だけど、今回は条件が悪い」

そう、最悪の条件と言っている。

「条件とは？」

「悪魔を呼び出すために、実は大した魔力は必要ない。魔力量だけで言うなら一般的な、平均的な量があれば問題ない」

「だけど、問題は悪魔が望むもの、つまり上質の餌です。悪魔にとつての上質な餌って奴はつまり魔力の濃度が濃い奴なんですよ。魔力の質が高い奴と言ってもいいかもしれませんね。奴らは魔力の量より質を好む」

だが、と金が先を受けとる。

「条件が最悪なのは、この学舎には魔力が高品質かつ大量の奴が分かります。二人はいるってことなんだよ」

雅はハッと気づいたように手のひらで口許を押さえる。

「黒部君とヴァイス先生、ですね。四色の本物の内の二人です、それくらいのキャパティシがない方がおかしい」

「イグザクトリィ（そのとおり）」

何時代の言語だそれはとツツコミを入れそうになった黎也はしかしそれを飲み込み、話を続ける。ちなみに古代アリエス語である。統一言語になった現在、古典の中にしか見られない言葉だ。

「俺とハク以外にも候補筆頭だった黒坂とか名門の折紙とかいますしね。そうでなくてもこの学舎は国内最大の魔導学教育を行ってる教育機関です。そりゃ才能のあるやつらが国内からわんさかきますって」

それが今回の最悪の原因。この閉鎖された空間の中、魔力の濃度、質の高い者がおよそ百人。その中から更に選りすぐったであろう13人。それを餌にすればどんな悪魔でも呼べてしまっただろう。一人づつでも中級くらいの悪魔なら呼べてしまっほどのラインナップなのだ。

「まあ、もつとも」

そこで二人の言葉が重なる。

「このオレ（俺）を前にして

「悪魔」

「最悪」

なんてのは、」

二人の笑みが、最悪の悪魔のように、歪む。

「片腹痛いがな。」

その言葉に雅とハクリは苦笑するしかない。

「しかし、長話しちまったが、あとオレを含めて三人だろ？」

「ええ、13と言う数字に信用が置いて、かつ、この話の間に増えていなければ、ですが」

犠牲者と言えはかなりぞつとしない表現になってしまっただが。

「恐らくだが、ウチのクラスにいる折紙赤色は確実に入ってる。あのクラスの中でもかなりの高品質な魔力の持ち主だったしな」

「お前のクラスか今から行って間に合うか？」

「まず無理だな、残念だが諦めよう」

無責任な上に非人道の極みだった。これまでの経験から死ぬことは

無いだろうということなのだが、さすがは金と言わざるを得ない。

「そもいかねえだろ。とりあえず行くぜ、お前のクラスに」

「ま、そうだよな。了解だ」

廊下を走らないという常識はこの場合意味をなさない。走っている存在そのものが非常識なのだから。人にかろうじて認知される速度で金と黎也が走る。ついでに廊下に群れている下級悪魔を蹴散らしていく。文字通り蹴散らす。

すれ違い様に膝やら拳やらを叩き込んでいくのだ。走る速度に累乗され、とんでもない威力での攻撃がなされる。

そしてそのまま扉を蹴り開ける。そもそも押し戸ではなく引き戸であつたため、蹴るという行為で教室の扉は外れて反対側の窓ガラスを割って飛び出していった。

そしてその扉の向こう側の惨状に二人はため息をつく。ため息ばかりだ。

「銃の事を軽く忘れてたのは失敗だったな」

教室内には強い硝煙の臭いと倒され消滅していく悪魔、ドン引きしているクラスメイト、そして両手に拳銃を携えた銃がいた。

「お、金くん、遅かったね。こっちは片付いたよ」

恐ろしいまでに気の抜けたセリフ。

「どうなんだろうな？これ」

「やっぱり、忘れてたのは普通に不味かっただろ」

水島銃。その名前が示すそのまま、拳銃使いの少女である。百発千中の実力を誇る、世界屈指の銃使いの一人である。

「しかし、さすがは退魔銃、妖斃ようへいの三式だな。悪魔だろうが関係ないんだ」

「いや、まああいつの連射を受ければ、ダイヤモンドだって粉々になると思うが」

ふと、そこで金は辺りを見回す。

「えーっと？折紙赤色は何処だ？そもそもそいつによろがあつたんだが」

「あー、折紙君？さつき怪我して、今あっち」

銃が妖艶で指したその先には一人の男子生徒が壁にもたれていた。腕には包帯が巻いてある。

「折紙赤色か？ちよつと質問なんだが」

黎也が赤色に声をかける。

「なんだい君は？僕に質問？ふん、そんな権限が君にあるのかい？」
矢鱈と偉そうな態度だった。

「なんか、お前以上にムカつくんだが、こいつ」

振り返り金に言う。

「失礼な、オレと比べるな。どうせボンボンなんだろ？多目に見てやれよ」

本人を目の前にして遠慮もなにもない会話。失礼なのはどちらかと言っ話だ。

「君たち、僕が何者か知っているのか？折紙だぞ？折紙赤色だ。僕は……」

「折紙紫と折紙緋の三男だろ？色は赤。得意なのは四足動物型の召喚。赤の典型だな。ただしオレはお前がいまだに赤以外の魔術を使ったことを見たことがないんだが」

「金……。まあいいや。名乗りを此方からあげるのは礼儀だったかな。俺は黎也、黒部黎也だ。一応黒の本物なんぞをやってるが、まあ魔術師の家系としては平凡な方だよな」

ガタツ、椅子に片腕をかけてもたれていた赤色が大きく仰け反る。

「くくくく黒部先輩！？」

「ああ、そっか先輩なんだっけ？金と同年代だつて認識しかなかったから忘れてたぜ」

「なんでこの学舎で一番有名な魔術師が僕のとこなんか！？」
取り乱しすぎである。だが、本物という肩書きの権威はそれほどのモノなのだ。世界の魔術師からすれば一国の首相クラスの意味を持つ。

「悪いな、ちよいと聞きたいことがあるんだ。折紙君、この痣ある

かい？」

そう言つて黎也は赤色に手の甲を見せる。

「あ、あ、あ、あ、は、はいっ、あります！」

「ん、サンキュ。ってことはまずいぜ金」

「ああ。やれやれ、厄介なことだ」

泣いても笑つても、あと二人。

1 - 4 異常なまでに異常な通常

この学舎にいる二人の本物と呼ばれる二人の魔術師。

一ヶ所に二人の本物が揃うというのは前例が少ないのだが、第44代黒の本物、レイヤ・ネロ”・クロベ。そして第38代白の本物、ハクリ・ホワイト”・ヴァイス。この二人が生徒と教師という形で同じ学舎にいる。

他の本物は、天鵝で国際警察部に所属している、第41代青の本物、チンラン・”ブラウ”・ツアイこと蒼青蘭。ツアイ・チンランそしてそれらに終われる立場にある国際的暗殺集団のリーダー、第42代赤の本物、セキエ・”クリムゾン”・レッドことセキエ・レッドだ。

例えば、この一人一人が単独で悪魔を召喚しようと思えば易々と成功できるだろう。本物と呼ばれる魔術師は上級と言われる魔術師の中でもまた、体一つ分飛び抜けているのだ。中でも黎也は、魔術の開祖でもある初代黒の本物で歴代最高の魔術師と称賛される、ネロ・グレイルの再来とまで言われている。

ただし、召喚できたからと言って、それを制御できるのかと言われれば、全くそのようなことはないのだが。

「でも、今回のこの事態は明らかに召喚した悪魔を自分の下に使役しようって意図が感じられるよな」

中等部棟から高等部棟に続く渡り廊下を疾走する二つの影。いうまでもなく金と黎也だ。

「ああ、ただ召喚するだけならここまで大量の魔術師エサから魔力を引っ張る必要はないからな」

その二人の前に廊下をふさぐほどの巨大な影が現れる。ソウルレギオン亡者、自分さえ失った死霊の塊だ。

「邪」

黎也が地面を踏み切る。

「魔」

金が左足を軸に右足を跳ね上げる。

「だ!!」

そして同時に炸裂する飛び蹴りと回し蹴りのダブルキック。コンマ一秒のタイムラグもない見事なシンクロぶりだった。

そもそもが魂の集合体である亡者はその衝撃だけで曝散した。

そして二人は何事もなかったかのように、また走り出す。

「朱鷺鳥は俺のクラスの隣だ。林と雪代先輩がどこだったかは忘れたが、わかる方からしらみ潰しに当たるしかねえだろ」

やはり、悪魔は増えていた。そもそも知能の低い下級悪魔は頻繁にこの世界にやって来る。今回はこの学舎で条件が整っているので、どうしたところで多く出現してしまうのだ。

朱鷺鳥林檎がいるはずの教室の扉を勢いよく開ける。

「発っ!」

「第六の盾よ!」

目の前に放たれた火球をしかし黎也は冷静に止める。

「落ち着け朱鷺鳥、俺だ、黒部だ」

「あ、あれ? 黒部君?」

「へえ、朱鷺鳥林檎は字印を使うんだ」

魔術発動の引き金となる印には大きく三種類がある。黎也のように声などの音を媒介とする「音印」。字や図を媒介とし、天鵝や摩羯では符術とも呼ばれる「字印」。指の組み方や手の合わせ方を媒介とする「指印」だ。一般的によく使われるのは音印だが、人によって相性があり、字印や指印を使う者も多くはないが存在する。

「あんまり時間がないんだ。朱鷺鳥、手に数字の痣って出てないか?」

「え? 痣? ないけど」

「金、次だ」

「ああ」

「え? え?」

「つと、そうだ朱鷺鳥、林ってどこのクラスだかわかるか？」

「え？林君なら三つとなり」

「サンキュ」

それ以上全く語らず次に向かう二人、廊下の悪魔を蹴倒し三教室隣の扉を乱暴に開く。

「林！林葵！いるか！？」

「黒部？どうしたんだ」

槍のようなものを構えていた男子が気を緩めて声をかける。

「時間が惜しいから端的に聞くが、手の甲とかに数字が出てないか？」

「数字？そんなものは出てないが・・・」

「邪魔したな、金」

「あいよ、雪代麻沙羅って高二だろ？」

「ああ、上だ」

階段にも勿論悪魔がいたが、最早二人とも意に介さず蹴倒し踏みつけ蹴り落として進む。

そしてその適当な教室の扉に手をかけたとき、

「キャア！」

悲鳴が聞こえる。

「ちっ、タイミングが悪かったか」

教室に飛び込むが、予想通り下級悪魔が大量発生していた。

「烈風！」

擬音にすると「ドドドドド」というような表現が出来そうなパンチのラッシュを散発する。

「オラオラオラ、とか言いたくなる光景だな。何故か」

黎也が意味がわからない事を言いながら苦笑する。

そこいらに散在していた悪魔を文字通りあつという間に叩きのめし、倒れていた女子生徒を確認する。

「あー、やっぱり雪代先輩か」

「あ、れ？黒部くん」

「痣もあるみたいだな」

「と、確か土野金くん？」

「正解」

人気生徒会長である水島鏡の従弟であり、更に黒の本物の黒部黎也の友人である金はそれなりに名が通っている。学舎に来ないはずの金は何故か人気があるのはそういった原因もある。

「えっと、雪代麻沙羅、でよかったか？怪我したのか？」

「え？あ、ええ、いきなりさっきの変な生き物に襲われてね」

悪魔は確かにこの世界に来ることがあるが、それでも一般的ではなく、金のような日毎に事件が起こる日常でも送っていないければ関わることはなく、つまりその存在が悪魔だと気が付ける者はすくない。都市伝説の様に思われている節もある。

「ふむ。あともう一つ、その手の甲の数字、生まれつきとかじゃないよな」

「これ？うん、さっき出てきたんだよ。何かの呪いなのかしら」
魔術師ということで、たどり着く結論は似通ったものになるらしい。

「邪魔したな。黎也、行くぜ」

「ん、金、ちよつと行くところが出来たから一旦別れだ」

「ああ、あれね。了解だ。先にやっててくれ」

二人は違う方向に歩み出す。黎也は上に、金は下に。

屋上は異様と言ってよかった。一面に書かれた幾何学模様。誰が見たところで、それはいわゆる「魔方阵」と呼ばれるもの。だが、魔術師ならこれもすぐ分かる、その魔方阵がまだ完成に至っていないことが。

「ここまで大々的とはね」

そこには二人の人物がいた。一人は黒部黎也だ。

「屋上に来るのにしただって大変だったぜ。人避けの魔術から物理口ツクから、面倒くさかったから力ずくでこじ開けたが」

扉はひしゃげ、明らかにもう用をなさない物となっていた。

「つか、反応してくれないと寂しいんだがね、玄峰馬雲臨時講師」
そこでようやくもう一人の人物がこちらを振り向く。

「誰だね？君は」

「オイオイ、あんたの生徒の一人だろうが。非道いな」

言いながら黎也は右腕に魔力を集中する。

「悪いが覚えていないな。私の邪魔をしないでもらおうか」
言って馬雲が何かを投擲する。

黎也は右腕に溜めていた魔力に炎の形を与え、放出した。

空中でぶつかり、爆発する。

「符術って、また珍しいモノを」

爆風に煽られながら黎也が毒づく。

符術は字印の一種であり、札に記号や文字などの発動式を書き込み、そこにあらかじめ魔力を込めておくことで魔術のストックを作っておけるといふものだ。主に摩羯と天蝎で使われる魔術だが、使用者事態はそう多くない。

「フム、魔術師であつたか。しかし、印も使わずに魔術をはなつとは、面妖な」

「そいつぁーどーも」

しかし、珍しいと言えば黎也の魔術の方がよほど珍しいだろう。「無印」。

本来、魔術師は二つの式をつかう。魔術式と発動式だ。魔術式はその魔術を発動するための式で、一つの式を構築するのに一月から一年はかかるとされている。

炎を出す魔術であれば、どの様に炎を起こすか、可燃物は何か、助燃物は、炭素、水素、酸素の配分は、範囲は、形は、などその式だけで様々な条件を付けなければならない。一つの式を確立してしまえば、あとはその応用となるので、同系統の魔術を作る分には大した時間はかからないのだが、一人で複数の系統の魔術を持つものは、実は割と少ない。

そしてもう一つの発動式、これこそが所謂「印」と呼ばれるものだ。

自分の考えた魔術式を呼び出し、起動するためのスイッチの様なものなので、魔術式と関連付けを行うことで、一定の印を用いてそれと呼び出すのだ。

黎也が行った無印、これはすなわち発動式を形に表さず頭の中で行ったことになるのだが、つまりこれは実質上その場で魔術式を構築したに等しい。通常であれば最低一月はかかると言われているそれをだ。

「威力はさすがに印有り（オリジナル）より劣るがな」

「天才と言う奴か。お前、名前は？」

「ふーん？一応あんたの担当クラスにいるんだが。臨時講師とは言え、あんまし職務不熱心だと忖になるぜ」

まあ、どっちにしる忖だがな。と黎也は続けた。

「覚えとけよ黒魔術師。俺は黎也。黒部黎也だ」

そこで今まで無感動だった馬雲が軽く目を見開く。

「クロベ・レイヤ。黒の本物か。なるほど、この学舎にいるとは知っていたが、お前のような奴だったとはな」

「ああ、”最悪”の本物だ。あんたも運が無いな」

本物と言う名は受け継がれるべき名であり、同時に七つある「数の頂点」としての二つ名でもある。だが、それとは別に、今期の四色の本物には個別に二つ名がついている。曰く、

黒の本物、黒部黎也、”最悪”。

白の本物、ハクリ・ヴァイス、”悪質”。

青の本物、蒼青蘭、”性悪”。

赤の本物、セキエ・レッド、”悪辣”。

ほぼ悪口である。しかもこの悪口、本人達はそれなりに気に入っている節があるので始末に負えない。

ヒュルヒュルと、黎也の腕の回りに風がまとわりつく。

「第三の」

「ふん」

馬雲が符を投げる。

「風よ！」

その符が風により両断される。と、それが爆発を起こした。
「のわ！」

黎也は横っ跳びでその爆風から逃れる。

「起爆符ってな、またレトロなものを」

そして、地面に手を打ち、

「第五の礫よ！」

屋上のコンクリが複数の石礫となって馬雲に飛ぶ。しかし、それは馬雲にぶつかる直前に何かに弾かれたように碎けて地面に落ちる。

「防壁もしっかり完備か。まったく、めんどく」

その時、黎也は足下に貼られた符に気が付く、

「ヤバッ」

その声と同時にその場に最大一億ボルトを誇る本物の落雷が起こつた。

「ふむ、本物とはこの程度のモノか」

つまらなそうに馬雲が呟く。

「この程度で悪かったな」

落雷で起こつた煙の中、黎也は普通に立ち上がる。

「・・・なぜ無事なのだ」

「さてね」

理由は黎也の頭上から右側にかけてあつた。

「氷」

人体より水の方が電導率が高い。あの一瞬で黎也は氷で避雷針を作つたのだ。

「とはいえ、制服がやや焦げた。後でちゃんと請求するからな」
しかし、と黎也は続ける。

「誘雷符とは、いよいよもってレトロだな。ついでだ、こっちの雷も見せてやるよ」

そう言つて、左手を広げて前に突きだし、右手を引き絞る様に後ろに引く。

「第四の槍よ、雷となりて、突き穿て！」

一直線に電気が飛ぶ。

「ぬっ」

馬雲はそれを護符で防ぐが、電気は障壁の表面を走り裏にまで回ってきた。

「ちっ」

馬雲は護符を放棄し、大きく跳びすさった。

「賢明な判断だ。当たったら普通に焦げるぜ」

いつの間にか黎也は馬雲のそばまで急接近していた。「第三の風よ！」

形なき刃が振るわれる。

「くっ！」

そこに馬雲は何かの札を投げつける。

それは風に裂かれた瞬間、炸裂した。

「が、はっ！」

黎也は吹っ飛ばされてしたたかに背中を打った。

「ここで防御符じゃなくて起爆符投げるとか、馬鹿じゃないのか？！」

無論、その爆発を近距離で受けた馬雲自身もただで済んではいなかった。

右腕が使い物にならないほどにずたばろになっていた。

「ふっ、防護では意味がなかったのだな」

馬雲がまたいくつかの符を投げる、するとそれは先程からお馴染みになっている悪魔に変わる。

「・・・異界結びの魔術は禁術だろ。どこで覚えたんだよ」

魔術には禁術と魔法と呼ばれる特別枠が存在する。禁術は暗黙のうちに使用が禁止されているものを指し、魔法は科学では、物理的には、再現不能な真の意味での奇跡を指す。

「いかにも、暗黒魔術だ」

黒魔術での禁術を暗黒魔術と呼ぶ。

同様に、白魔術での禁術を支配魔術、青魔術での禁術を合製魔術、赤魔術での禁術を召喚魔術と呼ぶ。

「この世界とほんの少しだけズレた世界である、逆を言えばそのズレ以外は完全に重なった世界である魔界や天界。そのズレを一部ずらし直すことによってそこにアクセスする禁術」

勝ち誇るように解説する馬雲。

「その住人たちだ。お前1人に止められるかな？」

「まあ、止めてみるかな」

大きく足を広げ、また大きく利き手を突きだし、添え手を腹の辺りにおく天上天下の構え。

「久々だがね。天雲流師範、皆伝、黒部黎也、参る！」

そこからは一步。瞬動術と言う、足運びと重心移動で移動の速さを突き詰める術。その中でも奥義とまで呼ばれる縮地法。黎也が使ったのはまさにそれである。

一步で敵の懐に入り込み、後は、

「稲爪いなづま！」

その勢いのまま拳を突き抜く。

ガーゴイルの頭が砕け散った。

「稲光いなびかり！」

瞬速の回し蹴り。デュラハンの胴を薙ぎ払う。

「怒槌いかづち！」

縦回転の踵落とし。グレムリンを脳天から叩き潰した。

「久しぶりに動くと感覚がいまいち思い出せねえな」

トントンと右足の爪先で地面を叩き、

「津波！」

つきだした右腕を重心移動だけで突きに使い、引いた瞬間に更に同じ場所を左腕で殴り付ける。更に一体のグレムリンを撃破。

「細波さざなみ！」

頭部胸部下腹部に連続する蹴り。ガーゴイルを砂にする。

「高波！」

本来は頭を押さえ込みその顔面への膝打ち、ムエタイのカウ・ロイである。最後のデュラハンには頭部が無いので、胸部を叩き潰す。「ふう、これで終わりか？さすがに俺でも悪魔なんかそうそう数相手にできねえからな」

そう言つて黎也は地面に手をつける。

「悪いが破壊させてもらうぜ。迷惑だからな」

その時、魔方阵の欠けた部分が浮かび上がり、次いで激しく発光した。

「っなに！？」

黎也は何かに弾かれたようによろめく。

「金が、怪我したってことか！？」

驚愕するに値することだった。黎也でなくとも、金を知るものなら大多数が似たような反応をしただろう。

「ふ、ふははははははははははは！ついに来たか！私の悪魔が！」

「聞き忘れてたが！アンタ、悪魔なんか呼んでどうするつもりだ！黎也が叫ぶ。雑音が多く、声が通るかどうかのギリギリである。

「知れたこと！世界を滅ぼす！かつての白き悪魔のようにな！」

「・・・っ！」

黎也は息を飲む。

かつての悪魔、それは、

「無事か、黎也？」

破壊された扉から、かなりのんびりした声がかかる。

「油断したと言っかなんと言っか。まあ後は任せろ」

その声の主はもはや疑うべくもない。

「ああ、責任はとれよ、金」

土野金登場だった。

1 - 5 これで通常

三年程前の話になる。この国を含めほとんどの国は、一つの事件と一人の話題を連日のように続けていた。

性別不明、国籍不明、年齢不明、正体不明。そんな人物である。どれだけ調べてもどんな人物像も浮かばない。どれだけの調査でも手がかりの欠片すら掴めない。そのような事件であった。

殺人。殺人事件である。

ただし、規模が尋常ではなかった。

世界的シェアの大手製薬会社とその子会社、親族会社、合計14件。その従業員6853人全てが死傷したのだ。たった三日で。特に死者は3516人にも上った。

その事件は即座に世界に伝播し、目撃者の証言からその犯人はこう呼ばれることになる。

ホワイトオラ ディアフロ

白き眼の悪魔と。

魔方陣の中心から渦を巻くように風と、どす黒い光が溢れ出す。

「何で怪我してるんだよ」

「ちよつとばかり他意的な自殺を止めるためにな」

意味がわからないが畏でも仕掛けてあったのだろう。

「悪魔ねえ」

魔方陣からつき出された一本の手。それを見てさすがの金も苦笑いする。腕、肘まですでに金の身長を越えていた。

そこから想像できるに相当する巨体が魔方陣から這い出る。

「でっけえな、おい！」

黎也が絶叫する。

身体は人間と同じ形をしているその悪魔は、しかし身長設定がおかしかった。

「六メートルちょいってところだな」

一般的な成人の三倍強。目の前の悪魔のサイズである。

「我、汝が真名を問う！」

馬雲が叫ぶ。

「あ、そんな儀式もあつたな」

この問いに悪魔が答えることで契約が完了する。悪魔が答えない場合、契約は成されず、悪魔のみが好き勝手に暴れまわることになるのだが、

「バイル・ゼ・ブル」

悪魔はその問いにあつさり契約を承諾する。

「って、ちよつとまで！^{バイル・ゼ・ブル}暴食の悪魔だと！？^{ベルゼバブ}蠅の王じゃねえか！」

黎也、再び絶叫。ベルゼバブと言えは人の七大罪を司る悪魔の一つであり、暴食を司る。ある国で、かつては雨を降らし、豊作を司る神、バイル・ゼブルとして祀られていたが、それが別の神がいる国へ伝えられた際、バイルゼブル（蠅の王）と蔑まれ、いつしか悪魔としての定着が成されたのである。

「ま、そんな注釈とかどうでもいいんだが、でけえな」

金が見上げる。身長が低めの金と対比すると、さらに大きくなった印象である。

「この二人が最初の犠だ、ベルゼバブよ！堪能するがいい！」

「そして最後の晩餐だ。それすら食えないがな」

そう言った金はベルゼバブの腰の位置ほどまで飛び上がっていた。

「強風！」

簡潔に言えばただのパンチ。ただし、全体重を込めたものである。

速さ×重さ＝衝撃力

これはいわゆる科学の中の必然である。

ドムツと鈍い音がし、あろうことかベルゼバブの巨体がよろめく。が、そこは体格差。よろめきを整えると、重力にしたがって落下する金を蹴りつけた。

そもそもの体重が重い方ではない金は、一発で端まで飛ばされる。

が、その鉄柵に体勢を正して着地すると、
「旋風！」

鉄柵をスターターとして地面と平行な跳躍。その勢いのまま、ベルゼバブの膝頭を蹴る。

ベキツと、足が間接とは逆に曲がる。が、

「つと。治るのはやつ！」

普通にその足で攻撃を返してきた。

「なるほど、活きの良い前菜だ。が、大人しくする方が楽だぞ」

一応は共通言語での言葉なのだが、どこことなく不協和音のような耳障りな響きのある声。ベルゼバブのものだった。

「そうはいかないんだよな。こっちにも事情とかあるし」

足は普通にかわし、金も飄々と返す。

「そうもいかん。こちらは契約を受けた。その対価はもらわねばなふむ、本気を出すか」

今までと比較にならないほどの突きが、金に降り下ろされた。

激しい衝突音と共に屋上が陥没する。

「つぶねー」

その降り下ろされた腕の少し手前、金がベルゼバブの腕を押さえるようにして立っていた。

「これを避けるか。益々もって活きが良い」

「そいつぁーどーも！」

金がその腕を駆け上がる。その眼は先ほどまでと違い、完全に見開かれていた。

「猪口才な！」

ベルゼバブがその腕を大きく振る。

「悪魔の癖に、言葉をよく知ってるじゃねえか」

振り落とされ、地面に着地した金は地面スレスレを疾駆する。

そこに真正面からベルゼバブの蹴りが襲いかかる。

金は明らかに無理な方向に体を捻り、そのままあろうことか腕を蹴りあげる。

「ちょっと付き合ってもらうぜ！」

更にそのままベルゼバブの足を払い、

「涼風！」

回転するそのままの威力で平手を打った。

当然足を払われているベルゼバブに踏み止まれるわけもなく、六メートルを越える巨体は突き飛ばされ、フェンスに激突する。

「豪風！」

さらに金が追い討ちをかける。両手を使い、同じ場所への一刹那差での二連撃。

フェンスが壊れ、それを支えとしていたベルゼバブも落下する。

「旋風！」

落下するベルゼバブに金が上から蹴りを加える。正確には前方宙返りを加えた縦回転での踵落とし。

「つて、アホか！」

ツッコミは黎也。この学舎は五階建てであり、屋上はつまり六階位置に相当する。金はそこから飛び降りたのだ。

下で凄まじい衝突音がする。

「アイツだけはホントに」

黎也が額を押さえる。普通なら死んでいておかしくない、と言っかなぜ生きていると言いたくなる。

普通に五体満足でピンピンしている金は、こちらは超再生で復活したベルゼバブとグラウンドでまだ戦闘を続けていた。

「なんだあれ！？」

「キヤーツ！」

「ば、化物だ」

下から騒ぎが聞こえる。

「ちっ、目立ちすぎだぜ」

さすがに屋上から飛び降りて無事で済む自信のない黎也は、踵を返し階段へ向かう。

「ここで待っていてもらおう」

そこに符を構えた馬雲が立ち塞がる。

「ご遠慮！」

黎也は右手を振り上げ、

「第十一の紅蓮よ！」

今まで使っていた物の比ではない火炎が巻き起こる。

「なに！？」

とつさに防御に切り替える馬雲だったが、

「お先！」

その横をすり抜け黎也は階段を駆け降りていった。

「あらあら、これは凄いわね」

「そうですね。本格的に召喚された悪魔なんか始めてみましたけど、あんなにおっきいものなんですネ」

「んー、タロスで召喚された美麗魔は人間大だったって記録がある

メフィストフェリス

んだけど」

「個体によって違うんでしょうか？アレは何の悪魔でしょう？」

「蠅の王だとか」
ベルゼバブ

のほほんと会話していたハクリと夜月に黎也が割って入った。

「あれ？レイヤはあつちに参加しないの？」

グラウンドを指差してハクリが首を傾げる。

「いや、するけどな。いくらなんでも屋上からグラウンドまでショートカットできるのは金くらいだろ」

確かに、と頷く二人。

「ことのついでに様子を見に来たんだが、ま、大丈夫だな。他はパニクってるが、もはや収集つける気にもならん」

六メートルを超える巨人がグラウンドで暴れていれば、それはパニクにもなるだろうが。

「んじゃ、行ってくるから。大人しくしてろよ」

そう言つて黎也は再び保健室を後にする。

「黎也も好きよねえ」

「基本的に兄貴肌だからね。ほっとけないんだろうね」

グラウンドではバトルが続いている。と言つか途切れていない。ベルゼバブが召喚されてからここまで、二人のバトルには途切れがない。

降り下ろされる巨大な拳。金はそれをバックステップでかわすと回転してその腕を蹴りつける。

とつさに引き上げられる腕と、それにあわせて繰り出された蹴りを、今度は避けきれずに脚で捌く。

しかし、質量が違いすぎる。そもそもが軽量な金はその威力だけで吹っ飛んだ。

「つつー。いや、体格差つてのは割りと致命的だよな」

目の前の巨人を見て金は苦笑するしかない。

「疾風！」

金の身体が一瞬消える。次の瞬間には金の拳は、ベルゼバブの腹部に突き刺さっていた。

「ぐっ、人間、貴様はなんなんだ!？」

「通りすがりのかめ・・・、ん？今よくわからない電波を受信しちまったような？」

まあいいか、と、金は再び体勢を整える。

が、そこで動きが止まった。ベルゼバブの体温が急激に上昇したのだ。しかも周囲に陽炎ができるほどのモノである。

「そうか、豊作を司ってたんだっけ。雨と日照が使えるわけだ」

「丸焼きだな」

「焼かれてたまるかよ」

しかし、いくら金と言えど、高温のモノにさわって問題ないと言う訳には行かない。

「くそ、めんどくさくても一旦教室に帰るんだったな」

捌くことすら出来なくなつた攻撃をひたすら避けながら金はそうぼやく。

「金くーん」

その時中等部四年四組から誰かが顔を出した。誰かと言って、実際のところそれは言うまでもなく銃なのだが。

「忘れ物だよ」

そう言つて、金が机に立て掛けていた棒状の何かを窓から投げた。

「おいおい、乱暴に扱ふなよ。でも、」

ベルゼバブの攻撃を掻い潜りながら、金はそちらへ向かう。

「助かったぜ」

その、袋に包まれたものを空中で受けとると、一気に中身を引き出す。そしてそれでベルゼバブの腕を受け止めた。

「なに？」

中身は二振りの刀。一方は刀身から柄までが光の様に白く、もう一方は闇の様に黒い、そんな刀。

「行くぜ、陰、陽」

鬼刃・陰、鬼刃・陽。名前の示す通り、姉妹刀である。そして、

「はい、ご主人様」

「いきます、金様」

言葉を発する妖刀でもあった。

「また、随分と大きな方と戦つてらっしゃいますね、ご主人様」

「金様もホント、飽きませんね。私は楽しくていいんですけど」

「オレは楽しくねーんだよ。ほれ、陰、アズールの剣だ」

アズールとは火避けのまじないである。火事などの火に関する事故を回避できると言う。

「はいはい」

キン、と一瞬、鬼刃・陰が光に包まれ、次にそこに現れたのはすでに別の剣だった。

妖刀鬼刃。鬼シリーズと呼ばれる六振りの内の二振りである。その妖刀としての特性は、刃を交えた武器の外見と特性をコピーすると言うものである。

コピーすると言っても完全なコピーではなく、言うならば金に合わ

せたコピーである。例えば、所有者が限定されるような特性を備えた刀をコピーした場合、その所有者が金に書き換えられる。

「火避けの剣か。姑息なモノを・・・！」

ベルゼバブの高温はこの場合もう役に立たなくなる。

「じゃ、お互いに武装も整ったところで、第二ラウンド」
ファイト。

「よお、何であんた、悪魔とか召喚しようなんてアホみたいなこと考えたんだ？」

グラウドに出てみたところで、やることがなかった黎也は壁にもたれながら、同じくグラウドに出てきた馬雲に問いかける。

「知れたこと、私は彼の悪魔に引かれたのだ」

「彼のつてベルゼバブ（あれ）？」

馬雲は首を横に振る。

「否、あんな低劣なモノではない。もっと高貴で、かつ残忍な悪魔だ」

馬雲の目には果たして何が映っているのか、その目は虚ろだった。

「ん？高貴で残忍ってメフィストフェレトス、て訳でもなさそうだな魔男爵か？」
アモン

「ふははは！いやいや、そのようなものではない！彼はこの世が産み出した、この世界だけの悪魔！」

「あ、もしかして」

ホワイト オフ ディアブロ
「白き眼の悪魔！彼こそ至上の悪魔だ！」

「うわぁ・・・」

ちなみに、ホワイトとディアブロでは言語が違うのだが、これは単純にこの名前が証言者の言葉を元に付けられたものであり、その中でもインパクトのある言葉を繋ぎ合わせたからだ。ただ、どちらも統一言語ではない旧言語なので、誰も気にはしないのだが。言語学者以外。

「似せたい悪魔コピ・ザ・デビルの一人か、あんた。そういうのは違うとこでやってくれ」

そういう会話の間も、二人の目の前では猛烈なバトルが続いている。グラウドが陥没し放題であり、しばらく陸上部は休部になることだろう。

「つか、あんな悪魔に憧れる部分であるか？」

「憧れ？そんなものは当たり前だ。やつの生き方、孤高であり、かつ回りを排除し、自分が一人であり続けたあの生き方が、憧れの対象でなくてなんだと言っただ！」

その言葉を聞いた黎也はため息をつく。

「なるほど、あんたも勘違いしてるタイプか。いや、あの行動だとそうとるのが自然なのか？」

「なに？」

疑問を投げる馬雲に黎也はそのまま話を続ける。

「ああ、似せたい悪魔コピ・ザ・デビルの中でも特に出来がよかった、安易な狂人イージー・クレイジー、偽りの悪魔も同じような台詞を吐いてたがね。お前ら、そもそも根本的に間違ってたんだ」

そこで黎也は馬雲を睨み付ける。

「白き眼の悪魔は、孤独になりたかったから大量殺戮あんなことした訳じゃないんだよ！」

「なん・・・だと？」

「つたく、いつもこいつも、勝手都合のいい解釈を他人の行動に嵌めるなよな」

心底下らなさそうに黎也は吐き捨てる。

「確かにあいつの行動はただの大量虐殺で、それ以外の何にも見えねえし、それ以外の意図なんて考えてもわからねえだろうがな」

ふと、黎也は金とベルゼバブの戦いに目をやる。相変わらず規模が滅茶苦茶のバトルを行っており、残像などというコミックの中にか無いようなモノまで生じていた。

「だが、アイツにはアイツでちゃんと行動に意図があったんだよ。」

間違えても、趣味や快樂であんなことした訳じゃねえ。誰だって、探し物を邪魔されたらキレルだろ？」

キレた結果が3500人強の大虐殺と言うのはやり過ぎにも程があるだろうが。

「だまれ！」

符から生じた火球が飛ぶ。

「第六の盾よ！」

それを黎也は冷静に防ぐ。

「黙れ、黙れ、ふざけるな！」

馬雲は腕を大きく広げ激昂していた。

「探し物だと？邪魔をしただど？そんなことが何故わかる！それこそ貴様の勝手な推測だろう！」

さらに馬雲は連続して符を投げる。

「貴様などにはわかるまい！我々の孤独が！独りでいるしかない、独りでしか生きられない事が！」

その火球を全て防ぎ、黎也は笑う。そして、

「分かるわけねえだろ！他人の事なんて分かるか気持ち悪い！他人に自分の事をわかってもらおうなんざ、ムシが良すぎんだよ！」怒鳴り返した。

それが聞こえたのか、ベルゼバブと戦っている金が大爆笑していた。「くははははは、そりやそうだ。当たり前だよな。別に他人の事なんて分からない、分かりたくもない、そんな面倒臭いことしたくないし、そもそも出来ない。当たり前だ。自分は他人になることなんて、絶対に出来ないんだから」

ベルゼバブの足を思い切り払い。浮いた身体を突き飛ばす。

「真月流拳術・涼風！」

一度距離をとると、

「いいぜ、ベルゼバブ。オレもそろそろ真面目にやろう」

そう言い、腕に付いていた金属製のブレスレットを外す。

そのブレスレットは、地面に落ちると、ズンツと沈み込んだ。

「ああ、一応、アダマントイン製だから、これ」

そして同じように靴に着いたストッパーを外すと靴底に仕込まれていた金属板が外れ、同じように音を立てて沈み込んだ。

アダマントイン。魔鉱金属と言う特殊な金属の一種であり、鉱物でありながら魔的特性を持つ。魔鉱金属には他にもミスリルやオリハルコン、ヒヒイロカネ等があるが、アダマントインの特性の一つは強度である。

その強度はダイヤモンド等を遥かに越す。

そしてもう一つ、それは重量。今金が着けていたブレスレット一つ程度の大きさで、おおよそ50キロ。両手両足で200キロ。その枷を金は外したのだ。

「行くぜ。ベルゼバブ！」

金が一瞬、目であらえられなくなる。

「真月流剣術、青龍・地土蜘蛛！」

沈んだ状態でベルゼバブの懷まで飛び込んだ金は、今度は上に延び上がるように刀を振るう。そして、延びきった直後、今度は一気に降り下ろす。

ベルゼバブの両腕が撥ね飛ばされた。

そして金は着地すると同時に、

「白竜・竜巻！」

足を斬り飛ばした。

そして、

「紅竜・炎火産神！」

轟音。斬撃と言うにはあまりにも破壊的なその攻撃は、それだけでベルゼバブを肩口から両断した。

「終了つとお！？」

全てが終わったと刀を納めようとした金に、予想外に攻撃がされた。とつさに側転するように回避する。

「うへ、さすが悪魔。真つ二つにしたのに生きてるとか」

見ればベルゼバブの手足は完全に再生し、二つに分けられた切り口

も、筋繊維のようなものが伸びて絡み合い、ほとんど修復されていた。

「不死身ってわけもないだろうが、さすが別世界の住人、殺そうとしたくらいじゃ死なないのか」

ギリツと刀の柄を握り込み、再び巨体に飛び掛かっていった。

「玄峰せんせーよ」

そんな金の様子を見ながら、黎也は幾分先程より落ち着いた様子で言う。

「悪魔、白き眼の悪魔を、その本質を、俺が知らないって、そう言っただよな」

「？」

馬雲が訝しげに黎也を睨み付ける。

「まあでもさ、実際、あんたの意見も10分の1位は正しかったりするんだよ」

馬雲の意見。孤独主義。

「別にアイツは孤独主義って訳でもないが、だからといって人恋しい訳でもない。アイツはさ、探し物をしてたって言っただろ？ 実際、アイツ自信も、何を探しているかはわかってなかったらしいんだが」

まるで、黎也はその相手と既知である様に語る。

「ただ、アイツの殺傷欲ってのは間違いない事実なんだよな。本質つつーか性質だ」

「貴様、先程から何を言っているのだ？ まるで貴様と彼の悪魔が既知の様に語っているが」

馬雲が低い声で訪ねる。

「既知だよ。知り合いだ。つつーか、気がつかないのか？ おかしいだろ？ 今俺達が対面している状況に、おかしい画があるだろ」

おかしいところと言うなら、悪魔がゴロゴロ出てきているのが既におかしいのだが。

「なあ、玄峰。上位悪魔なんて埒外の存在を相手に、単身二刀で立

ち向かう人間がいる図は、明らかに外れてないか？」

そう、まさに今、この目の前で起きているこの状況。この状況が既におかしいのだ。例え近代兵器を持っていたところで、悪魔相手に、対等以上に戦う人間など、皆無に近いだろう。

「気がついたか？アレが本物だよ」

黎也が薄く笑う。

「三元の要穴の一人、死の消滅、白き眼の悪魔」
スリー レス デッド レス ホワイト オフ デイアブロ

「土野金だよ」

見開かれた金の左の瞳は、光のすべてを反射する、白だった。

1 - 6 有り得ない事しか有り得ない

悪魔と言え、この世界に限れば固有名詞である。

つまり、白き眼の悪魔（ホワイト・オブ・ディアブロ）。

金は自分の事を悪魔だと認識している。悪魔である事を誇っている。それは、先の事件だけに起因している訳ではない。

実際、金は悪魔と呼ばれるだけの資質がある。

一つに、その怪物じみた圧倒的な暴力と殺人性。呼吸するように人を殺すので、当たり前のように人を殺すでもない。ましてや、殺したいから殺すわけではない。強いていうなら、金にとっての殺人は日常なのだ。

外を歩くのと同じ感覚で殺す。呼吸のように無意識なわけでも、それが当然なわけでも、それが趣味なわけでもない。

やる必要があるからやる。面倒だからやらない。金にとっての殺人はそのラインなのだ。

そして、その圧倒的なまでの死の興味の無さは自身に死がない事に起因している。

それが金の悪魔としての二つ目の資質。金には死がない。

しかし、それは決して、死なないと言うわけではない。金は殺せば死ぬし、何かの起因で呼吸ができなくなったり、心臓が止まったりしても死ぬだろう。

しかし、金の死は誰からも認識されない。これは試すわけにはいかない事象であるが、本人がその事を自覚している。金にとって死とは消滅の事だ。金が死んだ瞬間から金はそもそもないかったことになる。

親友の黎也や紅^{ひこう}からも、恋心を抱かれて^{かけがね}いる銃からも、家族である鏡や錠^{なりがね}からも、血縁である鈴達からも、金と言う存在がいたことは認識されるが、金が何か、何をしたのか、そう言った事が一つとして、誰からも認識されなくなるのだ。

思い出にすら残らない。

そして何より、生き返らない。魂は輪廻するが、金が死と言う終焉を迎えても、金は次の世代に輪廻しない。何故なら、死のない金に魂がないからだ。意思、精神、命は有るが、それを守る魂がない。だからこそ、金には死がないのだ。

「金には死がないんだ。割りとは知ってることだケドな。だからこそ殺すと言う行為に大した意味を見いだせないんだ。金にとって殺戮は、手段であって目的じゃないんだよ」

超再生を繰り返す悪魔を相手に、焦げ跡や軽い擦り傷などはあるものの、一切致命傷を負わずに金は戦っている。

「ま、ただ、自分に死がないがゆえに、アイツの本能は死を求めている。だからこそアイツはそれを自制してるんだがな」

黎也はそんな金を指差す。馬雲は愕然とその指先にいる金を見る。

「金は、精神的にも肉体的にも幾つものリミッターをかけてる。そうじゃなきゃアイツの本能も力も圧倒的に回りを破壊しちまうからな。一つがああ眼」

白い左目と、もう片方の黄色い右目。

「アイツは普段、眼を閉じてる。それは力を緩めるための制限の一つ」

次に黎也は先程金が投げ捨てた重りを指差す。

「二つ目は勿論ああ重りだ。ま、分かりやすいよな」

明らかに金の速度は上昇した。基礎体重が50キロもない金にしてみれば、アダマントインを四肢に着けると言うことは、自分を手足にぶら下げているに等しい。体重が五分の一になったのだ、身体能力は当然向上する。

「他にも精神的に色々制御かけてやがるからな。普通の人間がんなことしたら、生きることすらできないレベルに」

馬雲は放心している。

「あんな、子供が彼の悪魔だと？私が求めた悪魔は夢想だと？」

「いや、夢想でもないんだが」
聞いていなかった。

「ふ、ふふふ、ふはははは」
突如として馬雲が笑い始める。

「な、なんだ？」

「成る程、成る程！いないのか、あの悪魔はいないのか！」

「いや、いない訳じゃないって、きいてねーな」

「なら、俺になるしかあるまい！」

そう言いきると、馬雲は懷から一冊の本を引っ張り出した。

「^{グリモワール}って魔導書か？それ」

黒い外装であり、頁は皮洋紙、開いた頁には血、恐らく鶏血で文字が書かれている。

「それはドール讃歌（ドール・チャンツ）か。完全にあの悪魔を支配下に置くつもりか？」

ゴウ、と唐突に火球が黎也にふりかかる。

「つとと、自動詠唱だスベルフックと？んつとうに厄介だな、魔導書って奴は！」

魔導書はどれもこれも詩的で難解な書き方がされており、場合によつては言語すら不明なものまであるが、ドール讃歌は中でも内容解読の進んでいないものの一つである。

「俺たち魔術師には、それが操る系の魔導書だつてことは、直感的にわかるんだが、しかし、内容がわかつてる訳じゃねえしな」

ヤデイス星の巨大な星喰いミミズと関係がないことくらいしかわからねえや。と、黎也はぼやく。

「イサタワ・ウガチス・イエリエム（我が命に従え）！」

魔導書を掲げ、馬雲は高らかに詠唱する。ビクン、と、金と戦っていたベルゼバブが停止する。

「ちよつとくすぐつたいぞ、って感じか？」

「どつちかってーと、痛みは一瞬だ、って感じだと思つが」
意味のわからない事を言い合う二人である。

「オコス・イラツフ・ウソロク（そこの二人を殺せ）」

「アイ（やな）」

「ウセド（こった）」

目から知性の光がなくなったベルゼバブが金を襲う。
速い。

「ちっ」

地を蹴って一足跳びに下がる金。そして、

「白竜・竜巻！」

ベルゼバブの脇腹を切り裂く。さらに、

「第十一の紅蓮よ！」

黎也が傷口を焼く。だが、

「ちっ、やっぱり治るか」

そもそもが高い再生力を持っている上に、魔導書で能力の全体スペックが底上げされている。

「癒える事なき傷口（ガ・ボー）」

金が持つ黒い方の刀、鬼刃・陰が形を変える。ガ・ボー。ケルトの英雄デイルムッドが持つ三本の槍の一本。その槍でつけられた傷はけして癒える事がないと言う呪いを持った槍である。

右手には火避けの剣、左手には呪いの魔槍。夢のコラボである。

「瀧月流槍術・崩月！」

限界まで絞った左の槍を激しい突進と共に突き出す、槍の戦法として最もスタンダードかつ効果的な一撃。

まるで石と石を叩きつけた時のような鈍い音が響き、ベルゼバブの脇腹が挟れる。

「ちっ、避けるかよ」

金は勢い余って学舎の壁面に激突し、そこを砕いて停止した。

「真月流、黒竜・雨！」

その壁面をかけあがり（！）、上から真っ直ぐに右手の剣を降り下ろす。

しかし、それはベルゼバブに受け止められる。

「瀧月流・落月！」

右手を離し、槍を肩に突き込む。
音にならない苦悶。

取り落とされる鬼刃・陽（金の手から離れた時点で元に戻った）を
回収し、

くだきつき
「碎月！」

槍の石突きで腹部を強打する。
が、

「・・・成る程、都合の悪い奴」

振るわれる反撃の嵐を掻い潜りつつ、金は呟く。

治らない筈の傷口が徐々に治り始めていた。さすがに呪いのせいか、
治りは先程までの瞬間再生から比べるとあまりにも遅いが、治る時
点で十分に反則^{チート}だった。

「チートってお前が言うか、この非実在生物が」

「なんだそりゃ」

オレは非健全に健全だろ。と意味のわからない会話をしつつ、金は
ベルゼバブと距離をとる。

「しかし、オレに憧れてたとはね。前のデイモヌ・フェイクスもそ
うだったケド、意味わからねえよな」

あんな悪魔、どこに憧れるってんだ？と、言外に呟く金。ある意味
自分を全否定していた。

元に戻した二本の鬼刃を地面に突き立て、うーん、と金は伸びをす
る。

「さて、まあ色々あるわけだが、そろそろ夕飯の時間だし」

「終わりを始めよう」

言うや、一歩でベルゼバブの懷に飛び込む。

「紅竜・業火！」

爆発物の様な轟音が響く。ベルゼバブの左足が消し飛んでいた。

「白竜・竜巻！」

ついで右足が撥ね飛ばされる。

「黒竜・濃霧！」

左右の腕が切り刻まれる。

「青竜・地割！」

そして最後に真つ二つ。

もちろんそれで終わらない、その程度は回復することは、先ほど実証済みである。

「再生するつつつても、どうかに中心となる核みたいな物があるはずなんだがな」

そう言つて、金はベルゼバブを凝視する。

「視ることは金の専門だからな」

くつく、と黎也は笑う。もつとも、ドール讃歌に集中している馬雲は聞いていないのだが、構わずに黎也は続ける。

「ま、気がつけないのも無理ねえがな。金は半妖だぜ」

これは、ある意味爆弾投下に等しい発言であつた。

半妖。動物と妖物、この二者の違いは、単純な属性であり、実のところ形が同じであれば体構造や構成物に違いはない。故に人形の妖知類ならば人と子をなせるのだ。

しかし、同じといつてもやはり違う。光と闇は同じ場所にあることはできないのだ。だからこそ、人と妖の両の血が混ざった者を半妖と呼ぶ。人でも妖でも無いものだ。

「陰と陽の反発作用からか、半妖つてのは総じて体が弱いよな。だからこそ、金はおかしいんだよ」

さらに言うなら、妖なら必ず持つている異能力も、遺伝するはずの魔術の知識も、半妖にはない。しかし、金は体が弱いどころの騒ぎではない。悪魔と戦えるなど、普通の健全な人間や妖にもまずいないだろう。

「ま、数の頂点くらいならわからないが」

さらつと言つが黎也自身も実は数の頂点の一人だ。

「全校生徒のプロフィール覚えてるつてのも酷な話だろうがな、四

組の問題児くらいは覚えときな」

特殊な人間が揃っている、四組。

「金は三大妖族の一つ、百眼族のそれも王族の直系だぜ」

百眼族はその名の示す通り、目を司る一族だ。妖にはそれぞれ司る能力があり、三大妖族の残りの二つ、陰影族と鬼人族はそれぞれ影と力を司っている。

「だから、金にとって視る事は十八番なのさ」

視る事、見える事、診抜く事、観せる事、それらを全て司る。

「っと、つぶねーな」

降り下ろされた左腕を金は紙一重でかわす。

とりあえずその腕に蹴り。

とりあえずでは説明のつかない鈍くも瑞々しい音が響き、ベルゼバブの左腕は彼方へと消えていった。

「はあっ！」

見事な中段蹴りがベルゼバブの左足に炸裂する。本来狙うべきは腹部なのだが、単純に届かないのだ。

バランスを崩し倒れてくるベルゼバブに、

「九竜！」

頭から股までの正中線に五つの突き、両肩と両脚付け根に斬撃。

「白竜・風鎌居刀！」
かざがまいたち

音すら歪む超音速の居合い。切り離された五体を刻む。

「黒竜・天雲外鏡！」
てんうんがいきよう

地面や壁を蹴つての三次元全方位攻撃。刻んだベルゼバブの体を一所に押し纏める。

「紅竜・炎火産神！」
ほのかくつち

それを圧倒的斬撃で叩き斬る、というか叩き潰す。

「青竜・地土蜘蛛！」
ちつちくも

上から叩き下ろしたあと、下からすくい上げるような斬撃。叩き潰したパーツを、今度は飛散させる。

攻撃の最中もベルゼバブは絶えず再生し続けている。

超速での再生。粉碎と言ってもいいほどにバラバラになった悪魔がものの数秒で輪郭を取り戻しつつある。

「右胸部。位置はわかったが対象が小さい上に相手がでかい。難しいな」

大技の連発で、実は金の体も少なからず軋んでいる。

修復された足が降り下ろされる。

「ち、い」

鬼刃を杖にして無理矢理体を支え、横に飛ぶ。踏みつけられた足は風圧すら起こすものだった。

「再生力が桁外れすぎる！」

ベルゼバブ、暴食の悪魔。魔で例えれば、食とは欲の一つでしかなく、抑えるべきものだ。

だが、聖で例えた場合、それは体を育み、健やかなものにする。怪我の治りも食事一つで圧倒的に変わる。

悪魔とはいえ、ベルゼバブは暴食を司り、さらにかつては豊穡の神ですらあったものだ。その特性は圧倒的に性能に反映される。

この再生速度は悪魔全てに共通するものではなく、ベルゼバブのオリジナルなのだ。

「そっちを操りながら、俺にも攻撃できるってな、その魔導書、ドール讃歌ってそこまで高度なもんだったのか？」

実は金とベルゼバブのバトルが派手すぎるの人の見る目がそちらによつてしまっているが、黎也と馬雲も地味に戦っている。

見方を変えればこちらはこちらでかなり派手なのだが。炎やら雷やらが飛び交っている。なにやらビームの様なものまで飛んでいるようだ。何をやっているのか、というか、どうやって出しているのか
が判別不能である。

「第四の雷よ！」

雷は魔術壁に阻まれ、お返しとばかりに炎がとぶ。

「第六の盾よ！」

黎也も黎也で瞬時に防壁を作る。

「第十さうお!？」

次の魔術を発動する前に馬雲からの攻撃が来る。

「相手の発動待たずに攻撃は外道だろ！」

が、相手は外道である。

「そうだった。ずっと俺のターンってことか」

似たようなものだ。

「・・・ん？俺は誰と会話してたんだ？」

独り言ではないだろうか？

「無詠唱、瞬間発動、高威力。魔導書つてのは反則だよな」

黎也はそう呟くと、制服の中からなにかを取り出す。

それは拳銃、のように見られた。ただし、撃鉄もなく、^{ハンマー}弾装もなく、

あるのは握り（グリップ）と引き金（トリガー）、そして銃口^{リボルバー}
^{シリンダー}だけであつた。

「なら、これを使うのは卑怯じゃないな」

引き金を引く。火薬の着火する轟音は響かない。代わりに弓を引いたときのような空を切る音が聞こえた。

銃口から発射されたのは弾丸ではなく、光の塊だった。

魔導具と言つものがある。それは魔術の補助用具であり、魔導書も広義的にはその一つとされている。

その中で拳銃の形をしたもの、魔導銃。

^{シルバレイ}
「銀光」

史上最高と呼ばれた銃工にして物を司る妖、物品族が一人、^{たかしなたくみ}高品匠の作品である。ちなみに二丁拳銃で、もう一丁も黎也の懐に収まっている。

「その魔導書と似たようなもんだ」

言いながら乱射。ドール讃歌が生み出した炎の塊を相殺する。

「卑怯では、ないよな？」

更に黎也は乱射。徐々に競り勝っていく。

当たり前だ、魔導具とはあくまで補助用具。魔導書と言えど例外ではない。ドール讃歌やルルイエ異本（ブック・オブ・ルルイエ）、

あるいはナコト写本などといった自動詠唱の魔導書は自動で魔術を作るが、その魔力を出すのはやはり術者なのだ。

今の場合は馬雲である。術者の補助無しでもそれそのものが莫大な魔力を控えた死霊秘書ネクロノミコンや無記名祭書ネムレス・カルツ、黄衣の王（イエロウ・キングス）などの例外も無いではないが、ドール讃歌にはそのような機能はない。

ゆえに、魔力が減れば当然威力も弱まる。

「貴様、何故そこまで高威力の魔術を維持できる・・・！」

疲労の色が強い声で馬雲は問う。

しかも、実際はそれどころではないのだ。

実のところ銀光は匠の作った失敗作だった。あまりに様々な魔術効果を一回の発射に備えたため、一発で並の魔術師なら全ての魔力を奪われて衰弱し、場合によっては命を落とす、そのレベルの使うものに対する危険物なのだ。

それを黎也は、

「当たると矢鱈にヤバイぜ、この銃は」

相も変わらず撃ち続けていた。

黎也の魔力は底無しだ。一応魔力量の測定器というものがあり、それで魔力を計るのだが、黎也はいつもエラーを出す。

魔術は使い方によっては凶器になるため（まさに、今の状況だが）、四段階の検定試験があり、それに合格したものでなければ公的に魔術を使えない。

その項目の中には魔力量を記載する欄もあり、初級の一般的な魔術師の平均は1000。魔術の使えない一般人でも10以上はあるとされる。

中級魔術師でおおよそ10万。上級では100万を上回る者もあり、最高クラスの特級では1000万からがザラではあるが、黎也は測定不能でいつも空欄である。

空欄なのは世界で三人。黎也、ハクリ、そして青の本物である蒼青ツァイ・チン蘭だけだ。

ついに黎也の攻撃が馬雲の防壁を貫き、魔導書を弾き飛ばす。

「さて、金の口癖でもないけど、終わりを始めようか」

と、黎也が詰め寄ろうとしたとき、二人の間をなにかが通り抜け、壁に激突した。

激しい破壊音をたて、空き教室の壁が崩落する。

「つつー、クソ、完全に暴走したな！」

壁に突っ込んだのは金だった。その金に更に追い討ちをかけるようにベルゼバブが突っ込んでくる。

「ヤバ」

金は即座に立ち上がり、素早くベルゼバブの足を払う。

「ついしょお！」

更にその足を掴み六メートルの巨体を投げ飛ばす。

その両手の甲には生物の眼の様なものが表れていた。

「りきがん力眼」

百眼族の能力。それは眼を司り、それにまつわる事象を操ることだ。眼には力が宿るといふ。その体現がこの力眼。普通は込入ル眼（コミイレルメ）と呼ばれる能力だ。効果は、その眼の表れた部分の力を倍加する事。

半妖には通常異能力がない。これは陽の性質を持つ人と陰の性質を持つ妖では反発してしまい、どちらかの性質によることができず、双方の性質を失ってしまうからだという事が言われている。

半妖の異能力。ここでもやはり金は常識を軽く無視している。

「暴走した悪魔か、厄介すぎるよな」

見境がなくなっているようで、ベルゼバブの攻撃が金に特定されていない。

「ちっ、こっちゃんとはとけってんだ」

思い切り向こう脛を蹴りつける。そこでベルゼバブの視線がようやく金に向いた。

「ったく。だからって言うてなんともならないんだがなっ！」

今のままじゃな。とベルゼバブの破壊を避けながら呟く。

「あんまり使いたくなかったんだがなあ。仕方ない」

ベルゼバブを牽制しつつ、

「黎也、防壁、任せたぜ」

「あー、マジで？まあ頑張るけどさ」

何故かここで、金は援護ではなく、防御を黎也に指示し、そして黎也はそれを承諾した。

「第十の城壁よ、そは彼の多勢を押し止めし七つの砦、その堅き守りを以て、我らが駄命を包みたまへ、七つに重なりし巨壁（アイアス）！」

黎也とその周囲に強い光が七度輝いた。黎也の持つ最硬度の魔術防壁、アイアス。

「金、いいぜ、やっちなえ」

黎也のその言葉に金はニヤリと笑った。

「んじゃま、殺りますか」

瞬間、金の眼が赤く染まった。

[illegible]

金は笑い続けている。

ベルゼバブは瞬間的に再生させた手と、反対側の手を合わせて組み
 ぶりおろす。

今度は金が消えた。そして同時にベルゼバブの両腕も消え去った。

[illegible]

金の笑い声があちこちから響く。姿は見えない。が、金が攻撃したのは腕だけではなかった。

再生を直ぐ開始した右腕が、今度は肩から消し飛んだ。

そして同時に右足も根からごっさりきえる。

バランスを崩す暇など無い。次には左の肩口も消え去る。

さらには左足の膝下がなくなり、ベルゼバブの体は宙に浮いた状態になった。

次には頭が消滅した。

更に下半身が完全になくなる。

そして残った胴体の下半分がえぐりとられ、上半分のうち左側が削除される。最後に残った部分すら間髪も入れずに消え去り、ベルゼバブのボディは文字通り塵となつて消え去つた。

「ふう、もういいぜ、黎也」

ようやく姿を表した金の眼はもう赤くはなかった。

「ふう、常時魔力を送り込んで最硬度に保ってたつてのに、五枚割れたぞ」

第十の防壁は、黎也の防衛魔術の中でも最高位のものだ。とある世界最高の防御力を持つ魔導具のレプリカなのだが、その硬度は焼夷弾の直撃にすら耐えるものである。

それは七枚張る、最高防御。金のデビルズモードの直接の攻撃対象ではなかったはずのそれが、それでも五枚も割られた。それだけで、

いかに悪魔と化した金が悪魔であるかを物語っている。

「おう、銃もいたんだな、おまた」

眼も閉じ、ブレスレットと金属板を元に戻しながら金は馬雲に近づく。

「やれやれ、ま、あとは兄貴に任せるかな」

そう言っただけで放心している馬雲を立ち上げらせようとしたとき、ビクンツ、と馬雲のからだ跳ねた。

「っ！」

とつさに黎也と銃が拳銃を構え、金も一步下がって刀の柄に手をかける。

『やれ、やれ、まさか、あ、の体を完膚、無きまでに破、壊されるど、はな』

まるで、二重にかかったような声。同時に馬雲の全身に幾何学模様が走る。

「邪包印！」

黎也が声をあげる。

「邪包印だな。あの馬鹿、取り憑かれやがったらしい」

悪魔憑き。元来悪魔という存在には、この世界での体がない。悪魔を召喚するためには魔界とこの世界との相違を埋めることと、あと一つ、悪魔に擬似的な体を与える必要がある。倒した悪魔が塵となるのは、その体が維持できなくなるからだ。

そして、魔術の効果ではなく、何かの拍子に世界のズレが埋まってしまった場合、悪魔はこの世界に入る際にこの世界の生物の体を使う事がある。下級の悪魔なら虫や小動物がいいところで、大概は体すら手に入れないが、高い知能を持つ上級の悪魔の場合は主に魔力の高い人間の体を選ぶ。

その時に、体の中にある魔力の回路が黒く浮かぶ、これが邪包印と呼ばれるものだ。

「ちっ、玄峰なんて家系聞いたこと無いからな、恐らく単一性の魔術師なんだろ、こいつ」

「ああ、実理みてぶっ壊れたのか」

魔術を発動するのに必要な要素、それが実理だ。世界の理、世界の始終、そういったものだ。仕組みとも言える。

魔術師は通常、術式を展開して、自分の中の実理から結果を引っ張り出す。そうやって魔術を起こすのだ。

実理には二通りの手に入れ方がある。

一つは遺伝。実理は知識、知るモノではあるのだが、何故か記憶の継承ができる。魔力が関係しているという可能性が最近の研究で浮かんでいてはいるが詳細は今のところ不明である。

そして、もう一つが瀕死に陥ること。こちらの原理はある意味で単純だ。世界を自分とした場合、生が始まりで死が終わり。つまり世界の始まりから終わりまでを自分で体現しているのだ。ゆえに、世界の全て、実理を手に入れることができる。

ただし、後者には問題がある。いきなり、唐突に、それほどまでに膨大な情報を、何の事前準備もなしにはただの人間には受け取れないのだ。つまり、精神が崩壊する。ただ単純に発狂する者もいれば、「思想がおかしくなっちゃまって方か。なまじ自我があるぶん質が悪い」

思想、あるいは思考、そういった脳の中身が壊れた状態。実理を見ただものとしてはそちらの方が圧倒的に多い。

『こあ』

ベルゼバブは体にまだ慣れていないのかちゃんとした声が出ていない。

「しかし、こいつはまた厄介なことになったな。コイツは殺せない」
殺戮魔である金がとんでもないことを言う。

「殺さないのは前提だろ、普通」

そう言つて黎也は落ちているドール讃歌を拾い上げた。

「そもそも、実理のせいで精神が磨耗してたところにこんなもん使うから、悪魔にとってはさぞ入りやすい体だったろうな」

「あー、ドール・チャンツってそういう魔導書だっけ？」

操ることに長けた魔導書。それは操られることにも繋がるのだ。

『また会えたな、我が贄よ』

「よう、また会えたな、悪食」

馬雲の体を完全に乗っとり尽くしたらしいベルゼバブがついにしっかりとした声をあげる。

「・・・どうすんだ、金。お前、殺せないんだろ？」

そう、今の金には人が殺せない、約束と言う枷があるからだ。

殺意を解放する、デビルズモードの時ですら人を殺さない枷だけは外さない。ゆえにその他一切の制御が効かない訳なのだが。

「かといって、無理にひつpegすつても難しそうだしなあ」

そんなのんびりした会話を、しかしベルゼバブは待つてはくれない。一撃目は拳だった。トンツと金は黎也の背中を押し、自分は逆方向へ跳ぶ。その間をベルゼバブが通過した、のは、気配でしか判断できなかった。

「ちよつとまで、どんだけ速いんだよ！」

飽くまでも、乗っ取られたとはいえ、馬雲の体は人間のものなのだ、人間の能力以上は出せないはずなのである。

「身体の崩壊とか、まるで気にしなくていいからな。火事場の力まで目一杯解放して、克つ、魔力でブーストかけてやがる」

「わかつちやいたがやつぱり悪魔ってのはどいつもこいつもゲームバランス考えないチートばっかだな！」

ぜえ、と一息で突っ込みを入れて黎也が深呼吸と溜め息を同時に行う。

「まあ、だから悪魔なんだよ」

再度突進してきたベルゼバブの拳を、やや軌道をそらすことでかわす。

「しかし、このままほつといたら、あの悪魔が犯人の身体を取り殺しちまいそうだしな。犯人死んだら事件が解決しねえし、そろそろ金は不敵な、文字通り不敵な笑みを浮かべる。」

「終わりの終わりを始めよう」

ここからは、金の視点で語ろう。

一度閉じた眼を、金は再度開いた。リミッターの一つ、そして、百眼族たる金にとっては能力そのものの象徴。

その眼はまるで昆虫の複眼のようなものだった。

複眼とは、文字通りに複数の眼で構成されている。百を超えるその眼はそれぞれが並列して映像処理を行う。それゆえに昆虫は一コマ一コマを断続的に見ることで、映像としてはハイスピードカメラで撮影された画の様な、超スロースピードとなる。

金の今の眼もまさにそれである。

「ハヤミルメ速見ル眼」

通称、複眼。片眼に約400の眼を備え、その眼に合わせ脳の処理能力と神経伝達、リアクションタイム、さらには身体の反応速度を引き上げる能力である。

その引き上げ速度は一回につき約360コマ。事実上、金はこの能力を発動することで、360倍の速度で動くことができるようになるのだ。

ただし、ここまで大きな負担を身体にかける能力であるため、使用時間は約10秒ほどに限定されている。そうしなければ、金の体が崩壊する可能性もあるからだ。

人間の限界を越えた程度のベルゼバブとは桁の違う速度、たださえあつという間と言うにふさわしい金の瞬動術だが、今はもうそれすら生温い。大気の壁すら突き破るほどの速度で、金は馬雲に急接近する。

即座に複眼を解除。

「豪風！」

掌底の二連撃。

能力を解除したのには理由がある。複眼を発動したまま、すなわち360倍の身体能力のままでは、金の拳はマッハをゆうに越えてしまう。それを受ければ人体など易く打ち抜いてしまうのだ。

鎧徹し。内臓をダイレクトに攻撃するそれは馬雲を宙へと持ち上げ

る。

「烈風！」

乱打。本来は人体急所に的確に入る攻撃だが、金はそれを四肢に集中させる。

当然、ベルゼバブ^{II}馬雲の四肢は粉碎される。

「だが」

その手足は何事もないように再生する。

「さすがは暴食の悪魔。それとも豊穡の神の方の特性か？人間の中に入ってもそれは有効なわけだ」

やつぱ魂ひとつがすしかないか、と呟く金。

「死して斬る虚空」
カールスナウト

かつてとある英雄が持ち、その英雄の死後、英雄自身を傷付けたいう、死者を斬る短剣。

『先ほどもみたが、その刀はなんだ？なぜ形が変わる？いや、形だけではないな、その能力、特性も明らかに変化している』

ベルゼバブは神話という歴史に名を残す悪魔だ。あるいはどれかを見たことがあるのかも知れない。

「んー、あんまり自分の事語ると死亡フラグになりそうだけど。いや、死のないオレには関係ないのか？」

死がない。金にはこの短剣に意味を見いだせないだろう。

「ま、文字通り黄泉路の語りに教えてやろうか。オレのこの刀は鬼刃という。二振で一つの姉妹刀だ」

そう言つて変化させていないもう一方、鬼刃・陰の柄に手をかける。

「とある刀匠が鍛えた最高傑作でこのシリーズは合計で六本ある。

元になった金属が特殊でな、厳密には金属というか鉱物ではないんだが」

それは世の誕生以前からあるらしい。

「カオス。そういわれる物体だ。いや、物体ですらないのかな？その刀匠がそれを見付けた時は、偶然物体だっただけで、本来はどんなものでもないモノだ」

どんなものでもないが、そのかわりに全てであるもの。

「刀匠はそれに刃物という形を与えた。形というか方向性か。だからこそ、この刀はどんな刃物にもなれるのさ。ま、刃物という方向性を持つてしまったから刃物以外にはなれないんだが。ま、それがこの刀の正体だよ」

金は説明を端折ったが、鬼刃が変化する条件として金と鬼刃がその刃物を記憶している、というものもある。

「とりあえず説明はしてやったぜ。じゃ、これでなんの思い残しもなく帰れるな」

言って金はカールスナウトを前につき出す。

カールスナウトにはいくつかの逸話があるが、その多くが死者や幽霊に関するものだ。魂を斬る事に対して、絶対的な能力をもつのだ。

「魂振ル眼」

そう言う金の眼は、白眼の部分まで真っ青だった。

魂振ル眼、通称、霊視眼。文字通り、霊や魂を見る眼である。

今、馬雲の身体には馬雲自身の魂とベルゼバブの魂の二つが入っている。カールスナウトを使ったところで、どちらを斬るかは金が判断しなければならぬのだ。

その魂を見極めるための眼。殺さず斃す眼である。

だが、この眼にもリスクがある。と、言うよりは、金の持つ能力には全てにリスクがあるのだ。

そもそも異能力は一人につき一つが原則だ。複数持つ者は基本的に複数に見えるだけで実は一つと言う場合がほとんどなのだ。しかも、元来一つの妖の種族につき、一つか二つしか能力はない。一種族で三つ以上の能力を持つのは、金の出身である百眼族と、力に関する全てを司る鬼人族の二種族くらいである。

そして霊視眼のもつリスク、それは発動中は魂以外の一切が見えなくなるというものである。

「窮屈そうだなベルゼバブ。そんな殻に押し込めてまあ、大した力も出せないだろうにご苦労様だ」

金はカールスナウトを水平につきだす。

二つの魂が動く。言うまでもなく、ベルゼバブと馬雲だ。

『そうでもないぞ。貴様も我が器になればわかる』

「残念ながら貸せねーよ、この体は」

いいながらも金は闇の中の二つの塊を見定める。どちらが馬雲でどちらがベルゼバブか、それを判断する必要があるからだ。

「魂に名前でも書いてくれたら楽なんだがなあ」

約束上、そして雑業屋としての契約上、金には人殺しができない。

ここに社会的や倫理的が入らないのは非常に問題なのだが、金はそのようなことは一切気にしていない。また、回りの仲間もそれを金に教えるのを半ば諦めている。

心配がする。

「金！」

「っ！」

黎也のその声と一瞬の判断。金は横に跳んで回避行動をとる。その横を何かがすり抜けた。

「魔術か。ちっ、こいつも見えねえから面倒だ」

が、同時に金はしつかり確認した。魔術発動時に魂振りを起こしたのはどちらの魂だったのかを。

魂振りと言うのは浄めの儀式の一つである。荒御霊を押さえるの鎮魂であるのに対し、魂振りは弱った土地などに対して行われ、魂の動きを活発にし、再び活力を取り戻させるモノである。

金の眼、魂振ル眼はその魂の動きを見るものなのだ。

そして、魔術は体でなく魂に刻まれるものだ。記録でなく記憶。ベルゼバブが馬雲の身体で魔術を発動できるのは、飽くまで身体と同時に魂までを支配しているからであり、魔術を発動する魂そのものは馬雲に違いないのだ。なぜなら、悪魔も分類上は妖物、持つのは魔力でなく妖力だからだ。

「黎也！」

「第十二の氷河よ！」

魔術で起こる魂振りは一瞬。だが、金がその一瞬を見逃すわけがなく、また、どちらの魂だったかを見忘れるわけがない。

黎也の中位氷系魔術が馬雲の身体を固める。

「らっ！」

その隙に、金のカールスナウトが馬雲とベルゼバブの魂を切り分け、更にベルゼバブの魂を両断する。

シザンウメ
「死誘ウ眼！」

ちなみに通称、滅死眼。霊視眼とは対極な真紅の眼であり、能力も対極の命を止めるものである。

「さて」

金の視覚に頼って言うなら、それは物のどこかを中心に無数に走る糸のようなもので、その糸を断つことでその部位の機能を停止させる事ができる。さらに、中心の束をつき壊せばそのもの自体を崩壊させる事ができる、死神の眼である。

リスクは身体を襲う無数の槍で刺し貫かれるような激痛。そのかわりに金のこの眼は、文字通り何でも殺せる。

さよならだ
「アリーヴェデルチ」

変化させていなかった方の刀、陰で、ベルゼバブ魂の中心（魂自体は見えないが、魂の糸は見えている）の糸の束を完全に両断する。

□

「！！！！」

声ですらない声、音ですらない音が響き、今度こそベルゼバブの魂はこの世界から消滅した。

「これで終わり」

つまらなそうに金が呟く。

「さて、黎也、銃、後始末だ。兄貴と紅にも声かけといてくれ。残ってる雑魚を一掃してさっさと帰るぜ。臨時収入だし、姉さんも呼んで飯でも食いにいこうぜ」

実際問題、つまらないことはなくとも金にとっての日常はこんなものである。だからこそ、金は軽くこう言うのだ。

「さ、とつとと終わらせて帰るぜ」

第一話了

1 - 7 異常（後書き）

前話からの投稿時期が開いてしまい申し訳ありません。

「妖ノ者」自体は続きますが、とりあえず作者の中で「学舎編」と呼んでいる章は終了です。

次回作はもうちょい早く投稿できるようにしますので、見捨てないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6465m/>

妖ノ者～アヤシノモノ～

2011年9月8日23時20分発行